

# 中牟田遺跡

民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（17）

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（17）

中牟田遺跡

一〇二四年三月

鹿児島県志布志市教育委員会

2024年3月

鹿児島県志布志市教育委員会

## 序 文

本書は、民間開発（養鰻施設建設）に伴い、平成 21 年度に実施した、志布志市有明町に所在する中牟田遺跡の発掘調査報告書です。工事立会中に不時発見され、緊急の発掘調査を実施しました。

中牟田遺跡は縄文時代晚期や古墳時代終末期の複合遺跡で、特に古墳時代終末期（約 1,400 年前）の成果が注目できます。

不時発見にもかかわらず、7世紀頃の土器や須恵器、そして竪穴建物跡も 1 基発見され、集落遺跡であることがわかりました。

市内では近年、7世紀頃の集落遺跡の調査事例が増えており、今回の調査で 7 世紀頃の志布志の歴史を解明するための資料がさらに充実することになりました。

本書が市民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、地域の歴史や文化財に対する関心と御理解をいただきとともに、文化財の普及啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたり御協力いただきました株式会社鹿児島鰻や鹿児島県教育委員会等の関係各機関ならびに発掘調査や整理・報告書作成に従事・協力していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

令和 6 年 3 月

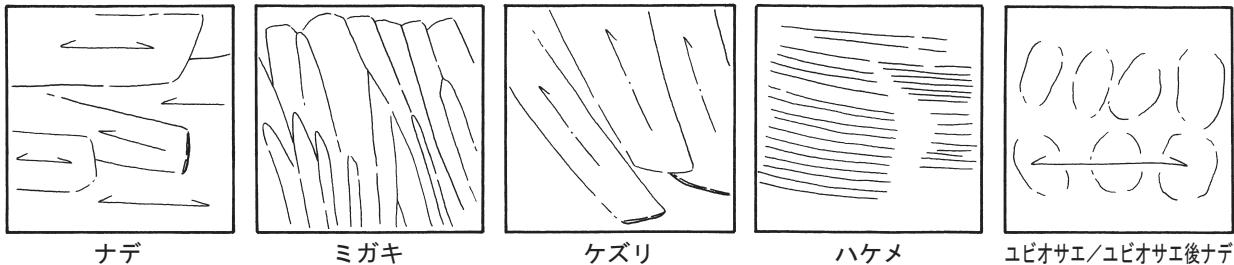
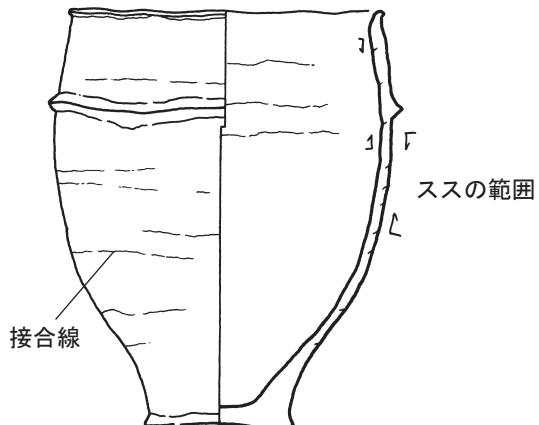
志布志市教育委員会  
教育長 福田 裕生

## 例　言

- 1 本書は、民間開発（養鰻施設建設）に伴う中牟田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県志布志市有明町蓬原字中牟田に所在する。
- 3 発掘調査は工事立会中の不時発見に伴い、平成21年度に志布志市教育委員会が実施した。
- 4 整理作業・報告書作成事業は、令和3・5年度に志布志市埋蔵文化財センターにおいて実施した。
- 5 本書で用いた方位は全て磁北であり、レベル値は工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 6 掲載遺物番号は通し番号とし、本文・表・挿図・図版の番号は一致する。
- 7 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 8 遺跡位置図等の地図は国土地理院発行の1:25,000地形図『志布志』、1:50,000地形図『志布志』、大日本帝国陸地測量部発行の1:50,000地形図を利用した。
- 9 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、出口順一朗が行った。
- 10 遺物の実測・トレース作業は、会計年度任用職員の協力を得て相美伊久雄が行った。遺構図と遺構配置図作成は、デジタルトレースを用いた。
- 11 遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて、相美と西園勝彦氏（公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター）が行った。
- 12 本書の執筆・編集は、相美が行った。
- 13 出土遺物及び図面・写真的記録類は志布志市教育委員会で保管し、展示・活用する予定である。なお、遺物注記の略号は「中牟田」である。

## 凡　例

- 1 本書で用いた遺構記号は、報告書まで固定している。
- 2 土層と土器の色調は『新版標準土色帳』に準拠した。
- 3 土器表面にススやコゲが確認されたものは、断面図に矢印でその範囲を示した（右図参照）。
- 4 土器調整痕の表現方法は、下図のとおりである。



## 本文目次

序文	第3章 調査の方法
例言・凡例	第1節 発掘調査の方法 ······ 7
目次	第2節 層位 ······ 7
報告書抄録	第4章 調査の成果
第1章 調査の経過	第1節 古墳時代終末期の調査 ······ 10
第1節 調査に至るまでの経過 ······ 1	第2節 その他の時代の調査 ······ 23
第2節 試掘調査・現地立会・本調査 ··· 1	第5章 総括
第3節 整理・報告書作成作業 ······ 1	第1節 古墳時代終末期 ······ 24
第2章 遺跡の位置と環境	第2節 その他の時代 ······ 26
第1節 地理的環境 ······ 2	遺物観察表 ······ 27
第2節 歴史的環境 ······ 2	写真図版

## 挿図・表目次

第1図 遺跡位置図 ······ 3	第14図 表土出土遺物（1） ······ 19
第2図 周辺環境の変遷 ······ 3	第15図 表土出土遺物（2） ······ 20
第3図 周辺遺跡図 ······ 6	第16図 表土出土遺物（3） ······ 21
第4図 周辺地形及びトレンド位置図 ······ 8	第17図 表土出土遺物（4） ······ 22
第5図 土層断面図 ······ 9	第18図 その他の時代 出土遺物 ······ 23
第6図 古墳時代終末期 遺構配置図 ······ 10	第19図 関連資料（宮脇遺跡・上苑A遺跡） ··· 25
第7図 1号堅穴建物跡 平・断面図 ······ 11	
第8図 1号堅穴建物跡 掘方平・断面図 ······ 12	第1表 周辺遺跡地名表 ······ 6
第9図 1号堅穴建物跡 出土遺物（1） ······ 13	第2表 土器・須恵器観察表（1） ······ 27
第10図 1号堅穴建物跡 出土遺物（2） ······ 15	第3表 土器・須恵器観察表（2） ······ 28
第11図 1号堅穴建物跡 出土遺物（3） ······ 16	第4表 石器等観察表 ······ 28
第12図 IV層出土遺物（1） ······ 17	第5表 鉄器・鉄滓観察表 ······ 28
第13図 IV層出土遺物（2） ······ 18	

## 写真図版目次

図版 1	図版 2 古墳時代土器（甕 1）
①遺跡遠景（東から）	図版 3 古墳時代土器（甕 2）
②遺跡現況（東から）	図版 4 古墳時代土器（甕 3）
③西壁土層断面（東から）	図版 5 古墳時代土器（甕底部・坏底部）
④北壁土層断面（南から）	図版 6 古墳時代土器（壺・甌）
⑤SH 1 検出作業状況（北から）	図版 7 古墳時代土器（甌）・古墳時代須恵器
⑥SH 1 検出（北から）	図版 8 古墳時代土器（坏）・古墳時代須恵器 ほか
⑦SH 1 遺物出土状況（北から）	図版 9 古墳時代石器・縄文時代土器 ほか
⑧SH 1 掘方完掘（北から）	

## 報 告 書 抄 錄

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

志布志市教育委員会（以下、市教委）は、文化財の保護・活用を図るために、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

平成21年3月27日、志布志市建設課より「国土利用計画法に基づく土地売買等届出書に対する処理について（通知）」が届き、株式会社鹿児島鰐（以下、民間事業者）が志布志市有明町蓬原において養鰐施設建設を予定していることが判明した。

これを受け、市教委と民間事業者は埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るために協議を行った。その結果、事業着手前に試掘調査を実施することになった。

### 第2節 試掘調査・現地立会・本調査

遺物包含層の有無等を確認するため、平成21年4月7日に試掘調査を行った。

調査方法は、切土による造成を行う範囲内に3×2mを主とするトレンチを3か所設定し（第4図参照）、重機により掘り下げを行った。

その結果、2トレンチの表土下1.4mから古墳時代の土器が出土した。しかし、出土した層は流れ込みを感じさせることから、プライマリーな遺物包含層ではないと判断した。

4月27日、鹿教文第58号にて工事立会を実施する旨の通知がなされた。これを受けて、6月8日から工事立会を実施した。

翌9日に堅穴建物跡を検出したため、市教委は民間事業者と協議を行った。その結果、工事を一時中断して、市費による緊急の本調査を実施することとなった。

調査体制及び調査の具体的経過は、以下のとおりである。

#### 調査体制（平成21年度）

調査主体 志布志市教育委員会

調査責任者 志布志市教育委員会

	教育長	坪田 勝秀
調査事務局	生涯学習課長	小辻 一海
	文化財管理監	米元 史郎
	文化財管理室長	竹田 孝志
	埋蔵文化財係長	上田 義明
	主事	大窪 祥晃
	主事	相美伊久雄
	技師補	上集 一樹
調査担当	主任主査	出口順一朗

### 調査の具体的経過

発掘作業は、平成21年6月8日から6月17日（実働7日）に実施した。調査の具体的経過は、日誌抄を週毎に集約して記載する。

（6月8～12日）

重機による掘り下げの立会。表土出土遺物の回収。

堅穴建物跡検出・検出状況写真撮影。レベル杭設置。

堅穴建物跡埋土掘り下げ。遺物取り上げ。

調査区北・西壁土層断面実測・写真撮影。

（6月15～17日）

堅穴建物跡埋土掘り下げ。遺物出土状況写真撮影。堅穴建物跡床面検出・実測。

堅穴建物跡貼床土掘り下げ、掘方床面検出・実測。完掘状況写真撮影。

### 第3節 整理・報告書作成作業

整理作業は発掘調査終了後、遺物洗浄、注記、接合・復元の各作業を随時行ってきた。令和3年度において報告書刊行に向けての遺物選別・実測作業を行い、令和5年度に「中牟田遺跡発掘調査報告書作成事業」として報告書作成作業を実施した。

また、令和4年度において鹿児島大学埋蔵文化財調査センターの中村直子教授に遺物指導を頂いた。

調査体制及び作業の内容・経過は以下のとおりである。作業の具体的経過は月毎に集約して記載する。

#### 調査体制（令和5年度）

調査主体 志布志市教育委員会

調査責任者 志布志市教育委員会

	教育長	福田 裕生
調査事務局	生涯学習課長	江川 一正
	文化財管理室長	小村 美義
	埋蔵文化財係長	相美伊久雄
	技師	川路臥太朗
調査担当	埋蔵文化財係長	相美伊久雄

#### 作業の具体的経過

【8・9月】

遺物実測・トレース。土器拓本。

【10月】

遺構トレース。原稿執筆。

【11・12月】

原稿執筆。観察表作成。レイアウト・編集作業。

【1～3月】

入稿・校正。遺物収納。印刷製本。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

志布志市は鹿児島県の最東部に位置し、宮崎県都城市及び串間市と県境をなす。北は曾於市、南西は大崎町と接し、南は太平洋に向かって湾口を開く志布志湾に面する。平成18年1月1日に、志布志町・有明町・松山町の三町が合併して誕生した市である。

本市の地形は東から志布志湾に向かって緩やかに傾斜し、海岸近くで急崖となり、わずかな沖積平野を経て海岸線となる。この海岸線は、西側に旧期砂丘・新期砂丘に二分される砂丘海岸が続くのに対し、東側は日南層群で構成される岩礁海岸となる。市の北東部には御在所岳(530.4m)・笠祇岳(444.2m)・陣岳(349.3m)など、日南層群が構成する急峻な山岳地帯がある。

その西側には入戸火碎流が広く分布し、いわゆるシラス台地を形成し、志布志市の主体をなす。「原(ばる)」と呼ばれる比較的平坦な台地は、南流する前川・安楽川・菱田川など大小の河川の浸食作用による深い浸食谷(「迫(さこ)」)により細かく刻まれ、大小の狭長な台地となっている。

このシラス台地からは、北部の霧岳(408.3m)や中央部の岳野山(274.3m)、西部の宇都丘(179.1m)・草野丘(268.4m)など、市北東部同様の日南層群が構成する山岳・丘陵が突き出ている。

前述の三河川の流域には、高位・中位・低位の三段の段丘が認められる。低・中位段丘では、段丘崖下からの自然湧水により集落が形成されてきた。一方、高位段丘では、地下水位が深いために集落形成が困難であり、「蓬原開田」や「野井倉開田」などのように近～現代に開かれるまでは、畠地として利用されるにとどまっていた。

この地域の地質は古いほうから、日南層群—阿多鳥浜火碎流—夏井層—阿多(夏井)火碎流—旧期ローム層—入戸火碎流—新期火山灰層となる。日南層群は主に頁岩・砂岩の細互層から成り、年代は漸新世～前期中新世とされている。阿多鳥浜火碎流は夏井海岸の一部に認められるもので、23～25万年前とされる。夏井層は、下部の貝や植物の化石を含むシルト層と上部の礫層からなる。阿多(夏井)火碎流は黒色を呈する溶結度の低い均質な凝灰岩で、年代は8.5～10.5万年前とされる。入戸火碎流は、海岸に沿った地域では海拔40m程のシラス台地を形成する。下部には、大隅降下軽石層が存在する。

中牟田遺跡は、菱田川河口から約3.0km上流西岸の有明町蓬原字中牟田に位置する(第1図)。菱田川は河川改修以前には大きく蛇行し、本遺跡近くを流れているようであり(第2図参照)、本遺跡は菱田川沿いの自然堤防に立地する(標高約8m)。

後背の河岸段丘(「菱田原」と呼ばれるシラス台地東側の中位段丘である)上には、春日堀遺跡が所在する。本遺跡の北には、1日の湧水量が約3,500tである「普現堂湧水源」があり、環境省の「平成の名水百選」に選定されている。

### 第2節 歴史的環境

中牟田遺跡は、平成11年度に実施された農政分布調査で発見された遺跡である。

本遺跡が所在する志布志市には、現在約500ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が認められている。

戦前には、大正5(1916)年に六月坂横穴墓群について報告を行った瀬之口傳九郎氏や、昭和19(1944)年に出入口A遺跡採集の獨鈷状石器を紹介した梅原末治氏の調査研究がある。

戦後は河口貞徳氏・諏訪昭千代氏・上村俊雄氏・酒匂義明氏の学術調査・研究に加え、海老原行秀氏・瀬戸口望氏という志布志町在住の研究者による熱心な調査・研究が行われており、学史上重要な遺跡も多い。

1980年代になると、主に志布志町において圃場整備に伴う発掘調査が行われ、縄文時代の調査事例が増加した。

2000年代には、主に有明町において農道整備に伴う発掘調査が行われ、弥生・古墳時代の様相が明らかとなつた。2010年代になると、地域高規格道路(都城志布志道路)や東九州自動車道に伴う大規模な発掘調査が行われ、質量ともに充実した資料が増加した。

本市は現在の行政区画では鹿児島県に属するが、過去は日向国に属しており、明治4(1871)年の廢藩置県後も一時期、都城県や宮崎県に属した歴史もある。したがつて、この地域の歴史・文化を考える上で薩摩・大隅だけでなく、日向地方の影響も考慮する必要がある。

#### 旧石器時代

中須B遺跡・蕨野B遺跡では剥片尖頭器・角錐状石器等が、安楽小牧B遺跡ではナイフ形石器が出土している。

次五遺跡・和田上遺跡・中原遺跡・春日堀遺跡では、珪原型細石刃核が出土しており、硬質砂岩や珪質頁岩を利用している。珪原型細石刃核が濃密に分布する宮崎平野地域との関係や石材の原産地を考える上で注目される。

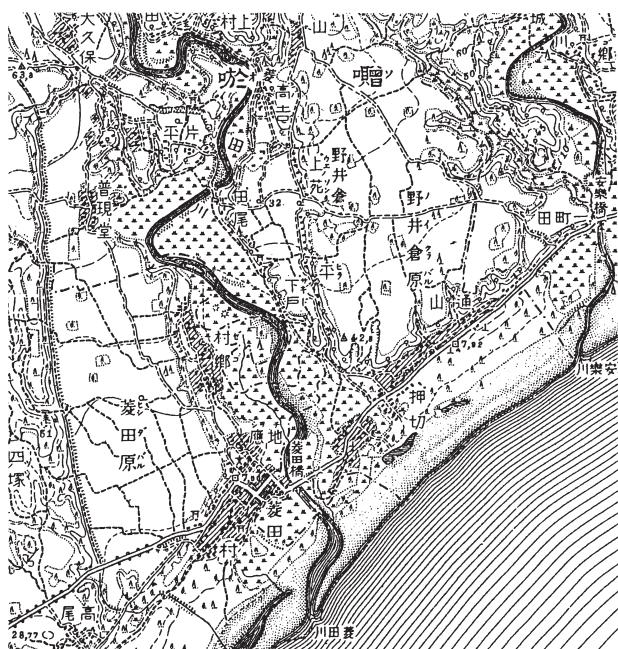
#### 縄文時代

志布志町では瀬戸口氏等の調査によって、「縄文銀座」と呼ばれるほど多数の遺跡が見つかっている。

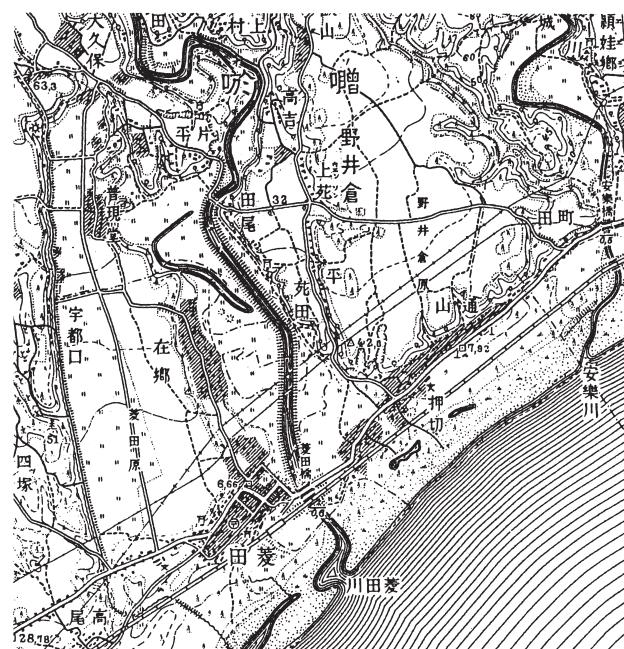
**草創期** 学史上重要な東黒土田遺跡がある。隆帶文土器や舟形配石炉、貯蔵穴が見つかっている。特に貯蔵穴から出土した堅果類は日本最古である。安楽小牧B遺跡では、爪形文土器が出土している。



第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000)



(明治35年)



第2図 周辺環境の変遷

(昭和10年)

**早期** 前半期の堅穴建物跡や集石、連穴土坑が多数見つかった倉園B遺跡・春日堀遺跡がある。春日堀遺跡は早期中葉が中心となり、質量ともに充実した押型文土器が出土している。

この他、前半期の連穴土坑や多数の集石、被熱破碎礫が見つかった稻荷迫遺跡・高吉B遺跡・下堀遺跡・横堀遺跡・次五遺跡・木森遺跡、塞ノ神A式壺形土器等の良好な資料が出土した夏井土光B遺跡、耳栓が出土した稻荷上遺跡・横堀遺跡・安楽小牧B遺跡など、シラス台地縁辺部に遺跡数が多い。

**前期** 曽畠式が出土した別府石踊遺跡、野久尾遺跡、倉園A遺跡、本村遺跡などがあるが、調査事例は少ない。

**中期** この時期も調査事例は少ないものの、春日式期の堅穴建物跡が見つかった前谷遺跡、野久尾式や深浦式・船元式が出土した野久尾遺跡、春日式や大平式の良好な資料が出土した倉園A遺跡のように重要な遺跡がある。大平式の良好な資料は宇都遺跡や山ノ口遺跡でも出土している。

倉園A遺跡では、中期後半～後期前半頃に位置づけられる石刀状石器が出土している。

**後期** 代表する遺跡として中原遺跡と片野洞穴がある。中原遺跡では在地系の宮之迫式・指宿式と瀬戸内系の中津式・福田K II式・宿毛式の良好な資料が多数出土している。片野洞穴では西平式～御領式期の動物骨や貝殻、釣針やかんざし等の骨角器が出土している。

市内は、中岳II式の遺跡が多く認められており、下原遺跡では堅穴建物跡と埋設土器が、稻荷迫遺跡では埋設土器が見つかっている。

このほか、後期のほぼ全ての型式が出土した家野遺跡、独鉛状石器が見つかった出口A遺跡がある。

**晩期** 井手上A遺跡や上苑遺跡では入佐式深鉢の埋設土器が見つかっている。小迫遺跡では黒川式期の良好な資料が認められており、クズの葉と推定される木葉痕をもつ組織痕土器が出土している。

#### 弥生時代

縄文時代に比べると調査事例は少ないものの、学史上重要な遺跡が存在する。一つは京ノ峯遺跡で、中期後半の円形周溝墓・方形周溝墓が多数見つかっている。南九州では稀有な墓制であり、近畿・瀬戸内地方の影響が考えられている。

もう一つは土橋遺跡で、明治40(1907)年、中広形銅鉾が見つかっている。県内唯一の、さらに本土最南端の発見例である。中期後半に位置づけられるもので、中広形銅矛は高知県中央～西部や豊前～豊後地域に分布が集中することから、豊後水道地域における地域間交流の過程でもたらされた可能性が指摘されている。

稻荷迫遺跡では中期前～中葉の入来I・II式期の土坑墓が検出された。この遺跡では、刻目突帶文土器の良好

な資料が認められている。刻目突帶文土器が主体を占める遺跡は大隅半島では稀であり、注目される。

小迫遺跡で出土した刻目突帶文土器期の精製浅鉢からは、イネやエゴマの圧痕が見つかっている。イネの潜在圧痕の放射性炭素14年代測定が実施され、南九州最古のイネ資料であることが判明した。

井手上A遺跡では、中期中葉の入来II式期の堅穴建物跡が見つかっている。中期後半の山ノ口II式期になると堅穴建物跡の検出例が増加し、高吉B遺跡、長田遺跡、本村遺跡、上苑A遺跡、下原遺跡、井手間遺跡、前谷B遺跡がある。

京ノ峯遺跡や高吉B遺跡、稻荷迫遺跡では瀬戸内地域から搬入された土器が出土している。夏井土光遺跡では柱状片刃石斧が出土している。

#### 古墳時代

集落遺跡は、有明町において調査事例が多い。仕明遺跡や春日堀遺跡では弥生時代終末期～古墳時代前期の、屋部当遺跡では辻堂原～笹貫式期の、長田遺跡では笹貫式期の堅穴建物跡が見つかっている。志布志町でも、稻荷迫遺跡において笹貫式期の堅穴建物跡が見つかっている。なお、春日堀遺跡で見つかった古墳時代前期の花弁形建物跡は県内最大である。

市内は、本遺跡のように笹貫式新段階期（7世紀代）の調査事例が多く、宮脇遺跡、安良遺跡、仕明遺跡、春日堀遺跡、上苑A遺跡がある。

春日堀遺跡では、堅穴建物跡・掘立柱建物跡・溝状遺構が見つかっており、7世紀中～後半頃の集落跡とされる。溝状遺構は、安良遺跡でも見つかっている。

上苑A遺跡は、6世紀末～7世紀後葉の堅穴建物跡が21基見つかっている。7世紀代の須恵器や宮崎平野部から搬入された土師器、炉壁や製鍊滓、精錬鍛冶滓等の製鉄・鍛冶関連遺物の出土が特筆される。

市内では、県内での出土例が少ない6世紀末～8世紀前半頃の須恵器が多数認められており、様相が不明瞭な当該期の南九州を考える上で、重要な地域である。

古墳は、前方後円墳の飯盛山古墳と小牧1号墳、円墳の原田古墳がある。飯盛山古墳は出土した埴輪から中期初め(4世紀後半)、原田古墳は出土した須恵器から中期中頃(5世紀中頃)、そして小牧1号墳は採集された須恵器から後期後半(6世紀後半)に築造された可能性ある。

この他、原田地下式横穴墓群や馬場地下式横穴墓群、京ノ峯地下式横穴墓群もある。原田3号地下式横穴墓からは、完全な形の三角板鉢留短甲が出土した。短甲以外にも長頸柳葉鎌、圭頭鎌、ヤリ先、鉄剣、刀子、有肩鉄斧、U字形鋏鋤先、鐔子状鉄製品など40点程の副葬品が見つかっている。地下式横穴墓としては県内最大級の規模をもち、県内最多の副葬品数である。志布志とヤマト政権との関係を考える上で重要な発見となった。

春日堀遺跡と安良遺跡でも地下式横穴墓が見つかっている。ともに古墳時代終末期の溝状遺構を掘り込んで玄室を構築しており、注目できる。

県内では2例しか認められていない横穴墓が、市内には存在していた。それは六月坂横穴墓群であり、明治42(1909)年に旧制志布志中学校敷地整地の際発見されたもので、後期末～奈良時代初め(6世紀後半～8世紀前半)の須恵器などが見つかっている。

六月坂横穴墓群や志布志湾岸では希少な6世紀代の前方後円墳である小牧1号墳の存在は、後に日向国諸県郡に属することになるこの地域を考える上で注目される。  
**古代**

水ヶ迫横穴墓で須恵器の蔵骨器が見つかっている。墨書土器が小迫遺跡、安良遺跡、牧ノ原A遺跡、井手上A遺跡で出土している。製塩土器が野久尾遺跡、宮脇遺跡、稻荷追遺跡、仕明遺跡など出土している。

8世紀代の須恵器が宮脇遺跡や安良遺跡などで出土しているように、8世紀代までは市内でも遺跡が確認されるものの、9世紀以降は様相がはっきりしない。調査事例が乏しいこともあるが、7世紀代に比べると遺跡自体が少ない可能性もある。

### 中世

この地域は中世において日向国諸県郡救仁院・救仁郷とされた。また志布志の名が史料で確かめられるのは、正和5(1316)年のこと、「日向方島津御庄志布志津大沢水宝満寺敷地…」(『沙弥蓮正打渡状案』)とあり、万寿3(1026)年平季基が開いた島津庄・日向諸県郡一帯の港であったと考えられている。

室町時代以降も交通の要衝として栄えていたようである。永禄5(1562)年に著された明の海防・倭寇対策書である『籌海図編』卷二(倭国事略)に薩摩・大隅の港の一つとして記された「審李署」は、志布志とされる。

このような交通の要衝であった志布志を巡って、中世の約400年間に武士興亡の歴史が繰り広げられた場所が国指定史跡の志布志城跡である。

志布志城とは、内城・松尾城・高城・新城の四城の総称である。志布志城は文治5(1189)年頃の救仁院氏の居城に始まって以来、榎井氏・畠山氏・肝付氏・島津氏など数々の領主に変遷した。

平成18(2006)年以降、保存整備目的で継続的に発掘調査が行われ、華南三彩のような中世後期の中国産陶磁器や東南アジア産陶器も出土している。

この他、建久(1190～1198)年間に地頭弁済使安楽平九郎為成の居城とされる安楽城跡、文治4(1188)年に平重頼によって築かれたとされる松山城跡、南北朝期(1359年)に救仁院氏の居城とされる蓬原城跡などが存在する。春日堀遺跡では、薬研堀の堀跡が検出されており、南に位置する天守城跡の一部の可能性が指摘されている。

中世山城以外の調査事例では、安良遺跡が注目できる。この遺跡では、掘立柱建物跡や竪穴建物跡が見つかっている。中世前期の輸入陶磁器や国産陶器のほか、畿内系羽釜、楠葉型・和泉型瓦器碗も出土している。炭化ご飯塊と炭化糞塊の出土も注目される。安良遺跡から約1km北に位置する安樂城跡や明治26(1893)年に境内から青白磁四耳壺の蔵骨器や鏡・青白磁合子などが見つかっている安樂山宮神社を含めて、その歴史的背景が注目される。掘立柱建物跡は、木森遺跡でも見つかっている。

長田遺跡や仕明遺跡では、中世墓が見つかっている。宇都上遺跡では、石塔類や輸入陶磁器、国産陶器、そしてタイ産四耳壺等が埋まっていた大型土坑が検出された。

### 近世

日向国諸県郡志布志郷とされ、東を高鍋藩福嶋院と接することから陸海ともにきわめて重要な郷であった。現在の志布志小学校に地頭仮屋がおかれ、その周辺には武家屋敷が建ち並ぶ「麓」を形成していた。この「志布志麓」は、令和元(2018)年5月に日本遺産に認定された。志布志麓に位置する福山氏庭園・平山氏庭園・天水氏庭園は、国指定名勝に指定されている。

藩米等の集積・積出港であった前川河口には、津口番所が置かれていた。藩政末期には琉球を通しての密貿易が行われ、その商人であった中山宗五郎の屋敷は「密貿易屋敷」と呼ばれていた。

地頭仮屋跡・福山氏庭園(福山氏邸)・津口番所跡・密貿易屋敷跡では、確認調査が行われ、陶磁器類が出土している。船追遺跡では、県内遺跡からは初の出土例となった三分金が見つかっている。

### 近代

明治4(1871)年の廃藩置県によって、鹿児島県諸県郡志布志郷となり、同年11月には新設の都城県に属した。明治6年には宮崎県の所管に移されたが、明治9年に宮崎県が鹿児島県に編入されることに伴い再び鹿児島県に属することになった。そして、明治16年宮崎県再設置の際は鹿児島県に残り、鹿児島県南諸県郡に属した。

この時期の遺跡では戦争遺跡が注目できる。太平洋戦争末期、連合軍の南九州上陸作戦(オリンピック作戦)を予想した日本軍は志布志湾沿岸に洞窟式の地下陣地を造った。その現存している一つが、権現島水際陣地跡である。野井倉台地には昭和20(1945)年に海軍航空隊志布志基地(野井倉飛行場)が建設された。

(参考文献)※発掘調査報告書は割愛した。

有明町誌編さん委員会 1980『有明町誌』

梅原末治 1944「大隅発見の異形石器」『人類学雑誌』59-7

大木公彦・内村公大 2012『夏井海岸の地形・地質調査報告書』志布志市教育委員会

小畑弘己・眞邊彩・國木田大・相美伊久雄 2022「土器包埋炭化物測定

法による南九州最古のイネの発見－志布志市小迫遺跡出土のイネ圧痕とその所属時期について－』『日本考古学』54

大西智和・鐘ヶ江賢二・松崎大嗣 2012「志布志市有明町原田古墳の測量調査」『鹿児島考古』42 鹿児島県考古学会

上村俊雄 1970「飯盛山古墳とその周辺」『九州考古学』39・40

上村俊雄 1977「志布志湾沿岸の古墳文化」『南日本文化』10 鹿児島短期大学南日本文化研究所

上村俊雄 1984「鹿児島県」『古代学研究』102

工藤雄一郎 2011「東黒土田遺跡の堅果類と縄文時代草創期土器群の年代に関する一考察」『考古学研究』58-1

志布志市誌編さん委員会 2023『志布志市誌』

志布志町誌編集委員会 1972『志布志町誌』上巻

志布志町教育委員会 1982『志布志の郷土史読本』第2集

志布志町教育委員会 1985『志布志の埋蔵文化財』

瀬戸口望 1981「東黒土田遺跡発掘調査報告」『鹿児島考古』15

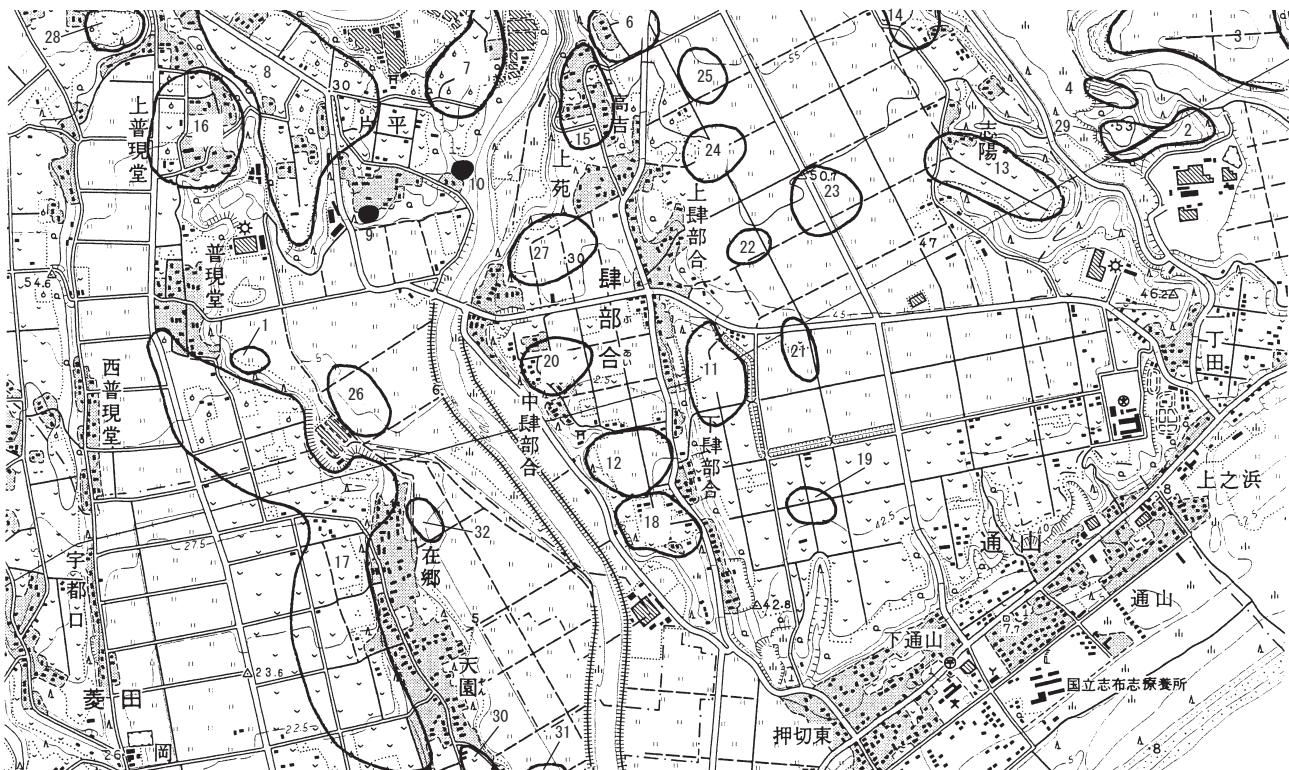
瀬之口傳九郎 1917「大隅国出土の銅矛に就きて」『考古学雑誌』8-2

山畠敏寛 2009「志布志港の「みなど文化」」『港別みなと文化アーカイブ』

第1表 周辺遺跡地名表

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世
1	221-464	中牟田	有明町蓬原字中牟田ほか	○	○	○	○	○	
2	221-235	小牧古墳群	志布志町安楽字小牧			○			
3	221-242	水神松	志布志町安楽字水神松			○			
4	221-284	安楽小牧A	志布志町安楽字小牧						
6	221-313	高吉	有明町野井倉字高吉ほか	○	○		○		
7	221-354	下水流	有明町蓬原字下水流ほか		○	○	○		
8	221-367	仕明	有明町蓬原字仕明ほか	○	○	○	○		
9	221-370	片平古墳	有明町蓬原字片平ほか			○			
10	221-381	片平城跡	有明町蓬原字下水流ほか				○		
11	221-383	大代	有明町野井倉字大代ほか	○			○		
12	221-384	平B	有明町野井倉字平ほか			○	○		
13	221-385	次五	有明町野井倉字次五ほか	○	○				
14	221-389	横堀	有明町野井倉字横堀ほか	○	○	○			
15	221-405	上苑	有明町野井倉字上苑ほか		○	○	○		
16	221-406	牧	有明町蓬原字牧ほか	○	○	○	○		

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世
17	221-423	春日堀	有明町蓬原字春日堀	○	○	○	○		
18	221-427	平A	有明町野井倉字平ほか			○			
19	221-457	坂上	有明町野井倉字坂上ほか					○	
20	221-458	木森	有明町野井倉字木森ほか	○			○	○	
21	221-459	鎌迫	有明町野井倉字鎌迫ほか			○			
22	221-460	上苑上	有明町野井倉字上苑上					○	
23	221-461	甚堀	有明町野井倉字甚堀ほか			○			
24	221-462	上苑B	有明町野井倉字上苑ほか					○	
25	221-463	下段A	有明町野井倉字下段					○	
26	221-465	田尾下	有明町野井倉字田尾下					○	
27	221-466	上苑A	有明町野井倉字上苑ほか	○	○	○	○	○	
28	221-507	牧ノ上A	有明町蓬原字牧ノ上					○	
29	221-	安楽小牧B	志布志町安楽字小牧	○	○		○		
30	468-40	地応寺	曾於郡大崎町				○	○	
31	468-74	菱田和田	曾於郡大崎町				○		
32	468-132	竹安	曾於郡大崎町			○		○	



第3図 周辺遺跡図 (1 : 25,000)

### 第3章 調査の方法

#### 第1節 発掘調査の方法

##### 1 発掘作業の方法

調査範囲は、主に竪穴建物跡が検出された箇所を中心とした範囲である。

表土や造成土から出土した遺物は、工事立会中に採集した。出土した遺物は遺構内出土も合わせると、1,000点程（コンテナケース8箱分）になる。

検出した遺構は竪穴建物跡で、「SH」の略記号を用いた。竪穴建物跡は検出状況の写真撮影後、土層観察用ベルトを設定し、埋土の掘り下げ、出土遺物の写真撮影・取上げ、土層断面実測・撮影、完掘、完掘状況実測・撮影を行った。

竪穴建物跡の掘り下げは、十字形にベルトを残す方法を用いた。埋土の違いを比較しながら移植ゴテで掘り下げた。出土遺物は、平板測量により番号を付して取り上げた。番号を付したもののは、380点である。小型の遺物や特徴のない遺物は、一括取上げを行った。

実測について、竪穴建物跡は1/20スケールで行った。

調査中及び終了後、遺構の検出層や埋土状況、遺構内出土遺物、土層断面等の情報から、遺構の形成時期や性格等の検討を行った。

なお、写真撮影時に使用したフィルムは、35mm判のカラー・白黒・カラーリバーサルの3種類である。デジタルカメラも使用している。

土層断面図は、調査区の地形が表現できる箇所を選んで実測した（1/10スケール）。

##### 2 整理作業の方法

図面整理は、遺物取上図と土層断面図、遺構実測図に分け、台帳や遺物との照合及び再確認を行った。

洗浄について、土器・礫石器・礫・鉄器はブラシを用いて土の除去を行った。

注記は、遺跡名を表す「中牟田」を頭に、表土等採集遺物は続けて「区」「層」の順で記入した。竪穴建物跡出土遺物は「中牟田」に続けて「SH1埋土」「取上番号」の順で記入した。

土器の接合は、時代ごとに大きく分類した後、型式・様式、さらには器種ごとに細分して行った。

接合後、報告書掲載遺物の選別を行い、実測・拓本・トレースを行った。

石器は、器種ごとに細分した。分類後、報告書掲載遺物の選別を行い、実測・トレースを行った。

実測遺物には、実測番号を付して作業管理を行った。遺物のトレースは、ロットリングペンを用いた。遺構配置図と遺構図、土層断面図はデジタルトレースを行った。

#### 第2節 層位

##### 1 層位（第5図）

本遺跡は、菱田川下流の川岸近くの自然堤防に立地している。そのため、地層に河川による氾濫堆積物を含み、安定している状況ではなかった。

地層の詳細は、以下のとおりである。

**I層**：黒褐色（10YR5/1）。現耕作土である。層厚は約30cm。

**II層**：にぶい褐色（7.5YR5/4）の硬質土で、酸化鉄の赤変が認められる。層厚は約10～15cm。

**III層**：黄灰色（2.5Y4/1）で、締まりがある。細かいパミスを含む。旧耕作土か？層厚は約10～20cm。

**IV層**：オリーブ黒色（7.5Y3/1）。径5～15mm程の軽石（池田降下軽石か？）を含む。造成土。層厚は約20～25cm。遺物を含む。

**V層**：黒色（10Y2/1）で、締まりがある。径5mm程の軽石（池田降下軽石か？）をわずかに含む。層厚は約10～20cm。

**VI層**：オリーブ黒色（7.5Y2/2）で、締まりがある。V層に似るが、色調が淡い。層厚は約10cm。

**VII層**：黒色（7.5Y2/1）で、締まりがある。層厚は約10～20cm。

**VIII層**：明黄褐色（7.5YR5/8）の砂質土。径5～15mm程の軽石（池田降下軽石か？）を含む。調査区全体には存在しておらず、氾濫堆積層の可能性がある。層厚は10cm以上。

**IX層**：黒色（5Y2/1）で、締まりがある。池田降下軽石をわずかに含む。層厚は30cm以上。

**X層**：黒色（N1.5/0）の強粘質土。パミスを含まない。層厚は約10～20cm。

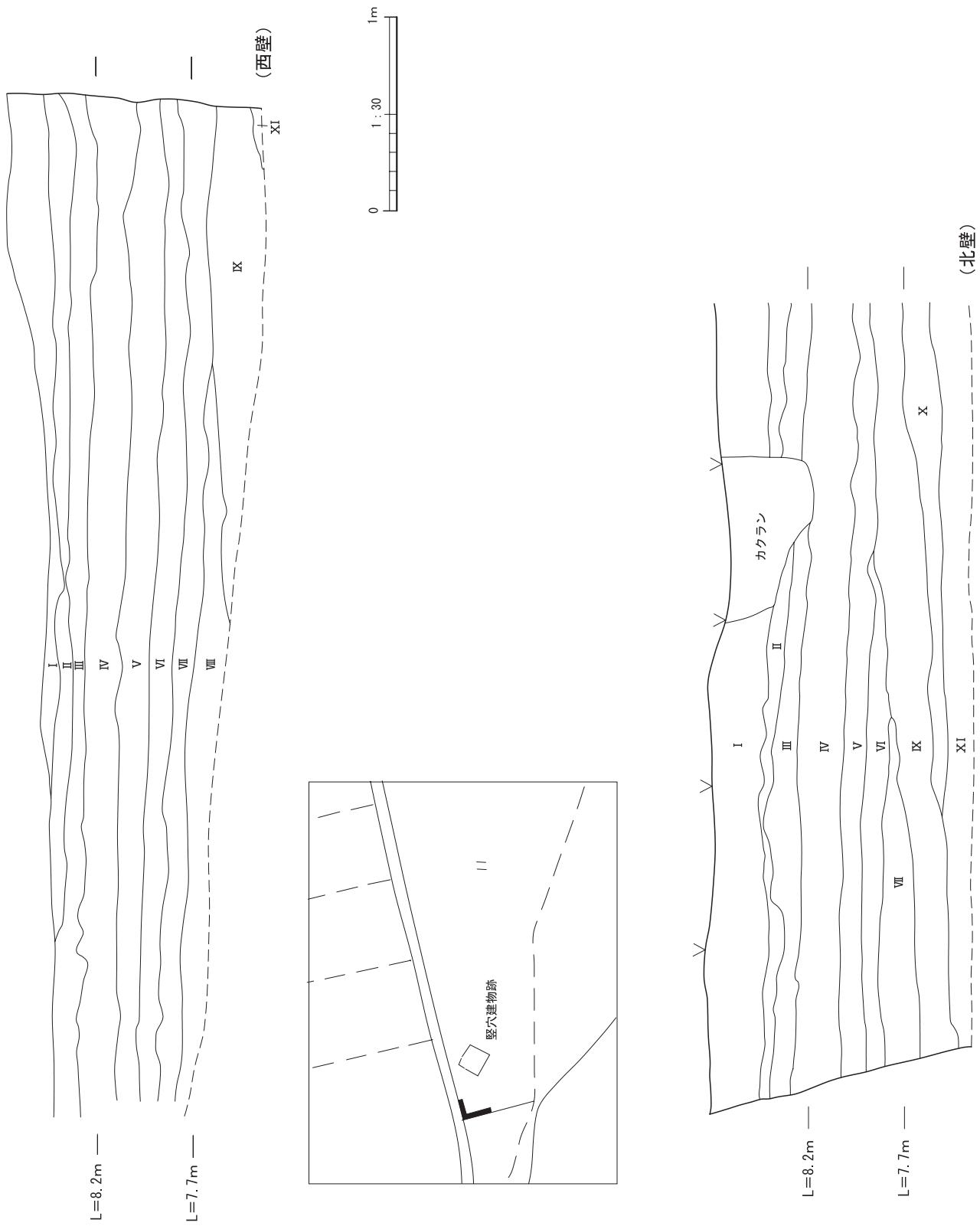
**XI層**：黒色（N1.5/0）の粘質土。径10mm程の池田降下軽石を多く含む。層厚は15cm以上。

**XII層**：明黄褐色（7.5YR5/8）。アカホヤ火山灰層。



第4図 周辺地形及びトレンチ位置図

第5図 土層断面図



## 第4章 調査の成果

### 第1節 古墳時代終末期の調査

#### 1 調査の概要

##### (1) 遺構 (第6図)

遺構は、竪穴建物跡 (SH) が 1 基検出された。

##### (2) 遺物

遺物は竪穴建物跡、そして表土と造成土と推定される層 (IV層) から出土している。土器や須恵器、石器、鉄器、製鉄・鍛冶関連遺物などが認められた。

これらは出土した須恵器から、古墳時代終末期に属する可能性が高いと考える

##### (3) 遺物分類について

甕については、細分を行った。

###### ア 甕

口縁部形態から 6 つに細分した (1 ~ 6 類)。詳細は以下のとおり。底部形態は脚台と平底があり、平底の外底面に木葉痕が残るものもある。

甕として扱ったものの中で底部が欠損しているものには、甕の口縁部も含まれている可能性もあり、注意さ

れたい。

##### 1 類：口縁部が内湾するもの。

強く内湾するものやわずかに内湾するものがある。

##### 2 類：口縁部が直行するもの。

##### 3 類：口縁端部でやや外反するもの。

内湾口縁で端部のみ外反するものや、直行口縁で端部のみ外反するものがある。

##### 4 類：口縁部が肥厚するもの。

内湾するものや直行するもの、口縁端部でやや外反するものが認められる。

##### 5 類：口縁部が外湾するもの。

##### 6 類：口縁部が内湾し、口径が小さいために短頸壺状のもの。

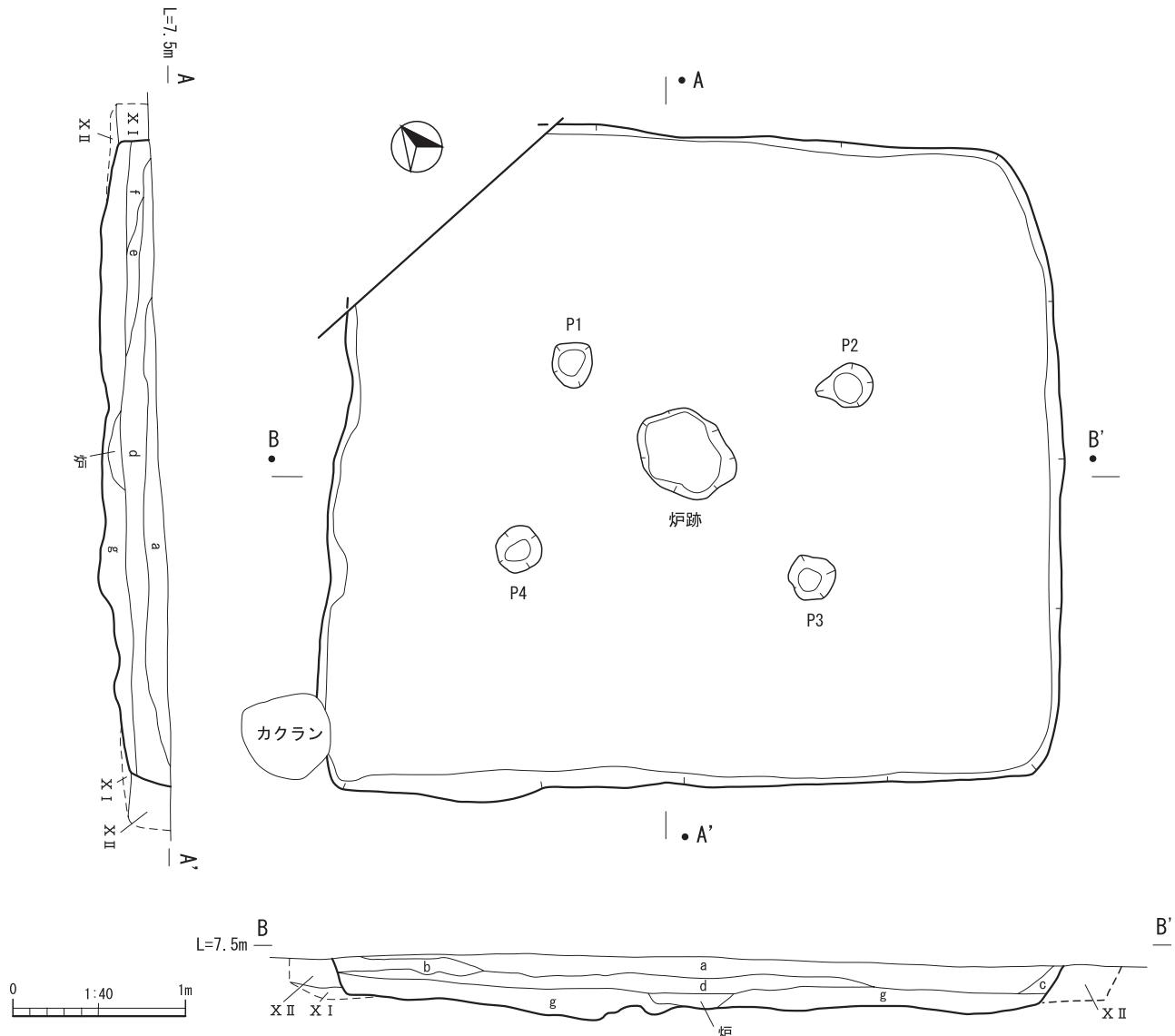
#### 2 1号竪穴建物 (SH 1) (第7・8図)

##### (1) 検出

VII~VIII層上面で検出した。検出レベルは、7.44~7.60



第6図 古墳時代終末期 遺構配置図



第7図 1号竪穴建物跡 平・断面図

mである。

平面形は、 $4.3 \times 3.9\text{m}$ の方形を呈する。ベルトを十字形に設定して、掘り下げを行った。

#### (2) 埋土

竪穴埋土は7層（a～g）に分けられ、埋土a～fは竪穴廃絶後の埋土（以下「竪穴埋没土」）、埋土gは貼床土である。レンズ状堆積が認められる。

a：黒褐色（10YR3/1）で、締まりがある。直径0.5cm程の軽石（池田降下軽石）をわずかに含む。

b：黒色（7.5YR2/1）で、やや粘性あり。直径1cm程の軽石を含む。

c：黒褐色（7.5YR3/1）で、やや砂質で、締まりがある。

d：黒褐色（10YR3/1）で、やや粘性あり。直径1cm程の軽石を含む。層厚は10～15cm。

e：黒色（10YR2/1）で、やや粘性あり。d層より締まりがあり、軽石の含有が少ない。

f：黒色（10YR2/1）で、やや粘性あり。直径1cm程の軽石を含む。

g：黒色（10YR2/1）で、締まっている。明黄褐色土ブロックを含む。

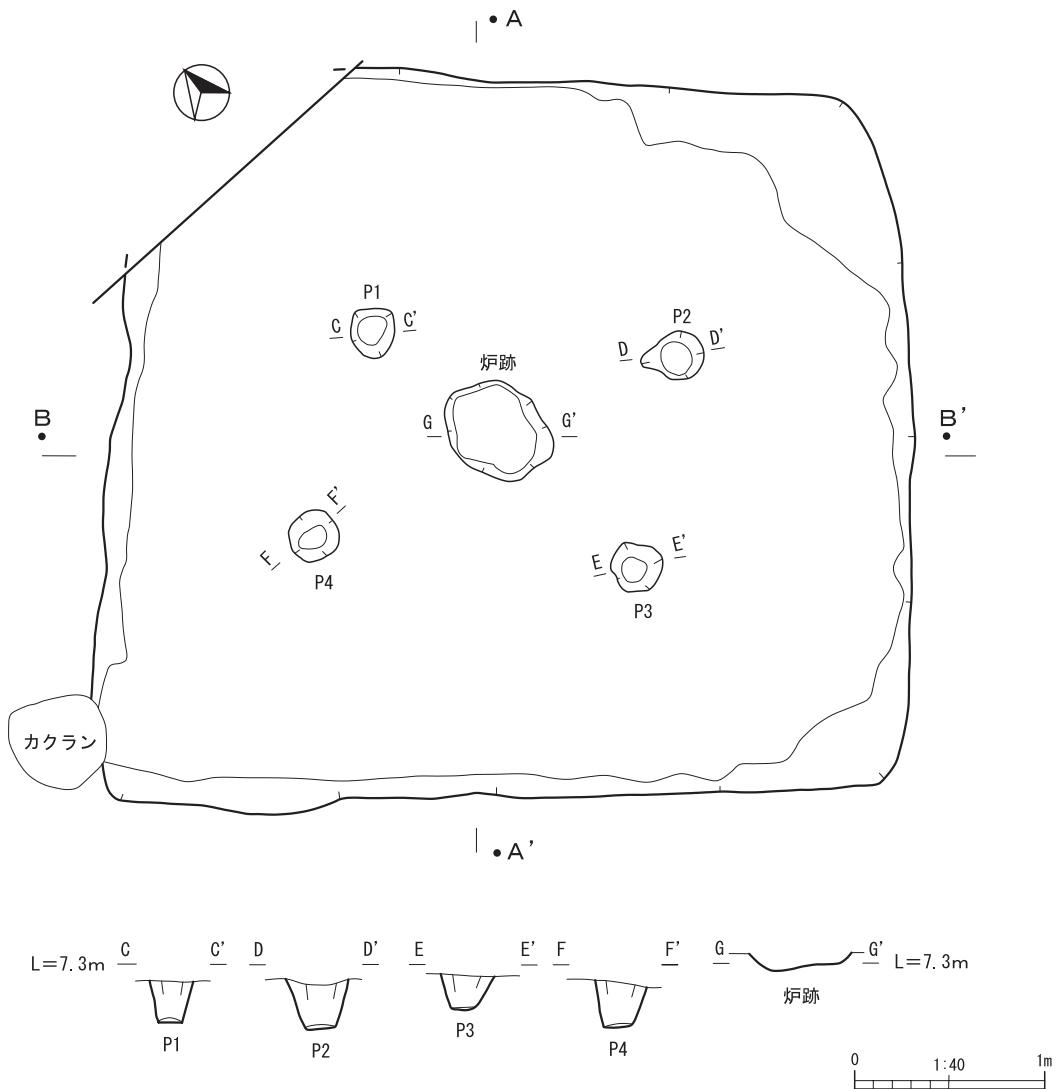
#### (3) 床面

埋土掘り下げ後、埋土gを検出し、その面を床面（生活面）と捉えた。

床面の検出レベルは7.40～7.43mで、遺構検出面からの深さは15～20cmを測る。硬化面は確認できなかった。

#### (4) 炉

ベルトを床面まで掘り下げると、床面においてやや赤みを帯びた土の範囲が確認でき、そこを炉と捉えた。



第8図 1号竖穴建物跡 掘方平・断面図

平面形は $0.6 \times 0.45\text{m}$ の不整橢円形を呈する。深さは10cmを測り、床面は貼床土と掘方床面である。

埋土は黒褐色(10YR3/1)で、にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する焼土や0.2cm大の白色軽石が混じる。

#### (5) 掘方

竖穴床面下場を実測後、ベルトを残して貼床土の掘り下げを行い、掘方床面を検出した(第8図)。

掘方の基盤層は、IX層である。最深部のレベルは7.16mで、遺構検出面からの深さは約40cmを測る。

掘方床面は、掘削痕と考えられる凸凹が残る。

#### (6) 柱穴

柱穴は床面において確認できず、掘方床面において4基検出した。

埋土は黒色(2.5Y2/1)のやや粘質を帯びる土である。褐色土を含む。

各柱穴の属性(長径×短径×深さ)は以下のとおり。

P 1 :  $0.27 \times 0.21 \times 0.22\text{m}$

P 2 :  $0.32 \times 0.26 \times 0.26\text{m}$

P 3 :  $0.28 \times 0.25 \times 0.19\text{m}$

P 4 :  $0.27 \times 0.26 \times 0.25\text{m}$

その配列から、4本柱建物と考える。

#### (7) 遺物(第9~11図1~30)

遺物は番号取上分で379点、一括取上分もある。土器、須恵器、石器、鉄製品、軽石が認められ、30点図示した。

##### ア 土器(1~19)

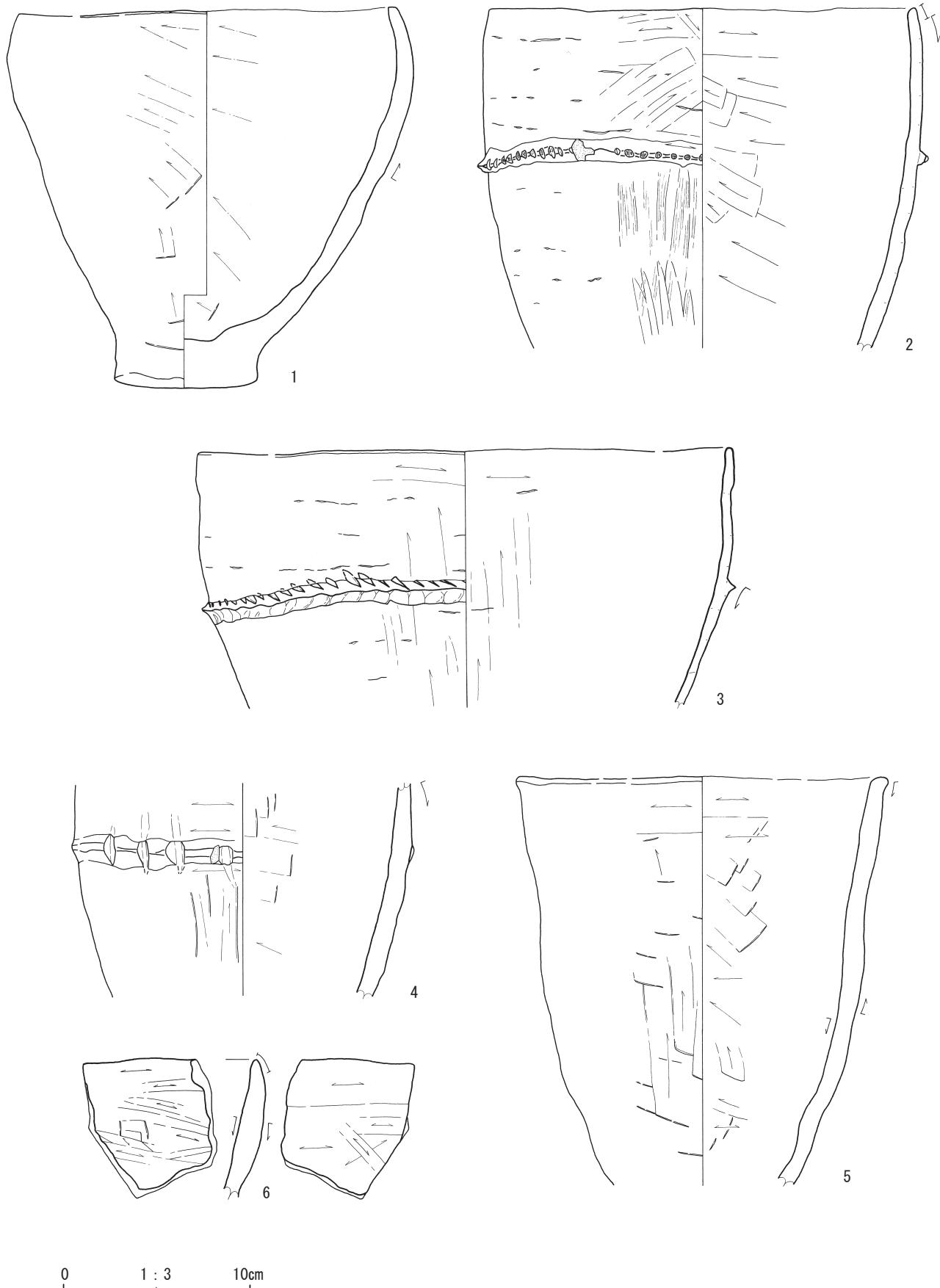
土器は甕、壺を確認した。

##### 甕(1~17)

##### 1類(1~4)

口縁端部で内湾するもの。1は突帶を貼付しないもので、歪みが著しい。2は口縁端部外面に白色物質が付着しており、甕と組み合わせて使用されたと考える。胴部外面にはハケメ状工具によるタテナデ調整を行い、胴部下位はタテミガキ調整を行う。

3は口縁端部でやや肥厚する。薄手のつくりで、大きさの割に軽い。突帶上位に貼付時の爪痕が残る。4は外面にケズリ状のタテナデ調整を行い、沈線状の筋が残る。



第9図 1号竪穴建物跡 出土遺物（1）

## 2類（5・7）

口縁部が直行するもの。ともに突帯を貼付しないものである。5は、器面に調整用工具の始点が良く残る。7は、外底面に木葉痕が残る。

## 4類（6）

口縁部が肥厚するもの。

## 5類（8・9）

口縁部が外湾するもの。8は、口縁端部内外面に白色物質が付着する。9は、口縁部が強く外湾する。胎土に赤色粒をわずかに含み、搬入品の可能性もあり得る。

## 6類（10）

口縁部が内湾するが、口径が小さいために短頸壺状のもの。口縁部と胴～底部があり、接合しないものの同一個体と考える。口縁部について、外面にススが付着していることから甌の底部片ではなく、口縁部片と考えた。

## 平底（11～17）

端部が張り出すものと張り出さないものがある。底面に木葉痕が残るものと残らないものがある。

12～14は、外底面にナデ調整を行うが、木葉痕が残る。16は、ヘラミガキ調整を行う。17は、何らかの圧痕が残る。

## 壺（18・19）

ともに小型の壺である。19は頸部が短いもので、外面にタテミガキ調整を行う。

## イ 須恵器（20～26）

坏が確認された。全て坏Gである。底部は回転ヘラケズリ調整を行うが、22のみヘラ切り未調整である。

20は橙色を呈し、見た目は土師器のようであるが、焼成が硬質であることから須恵器と判断した。21は浅黄橙色を呈し、見た目は土師器のようであるが、20と同様に須恵器と判断した。

## ウ 石鎚（27）

二面に敲打痕が認められ、正面は器面が凹んでいる。

## エ 棒状礫（28）

使用痕が認められない、棒状の礫である。

## オ 鉄製品（29）

ねじれおり、建築部材の可能性がある。

## カ 鉄滓（30）

碗形滓の可能性があり、裏面に砂粒が付着する。

## 3 IV層出土遺物（第12・13図）

土器と須恵器が認められており、13点図示した。

## ア 土器（31～42）

土器は甌、甌、坏、鉢を確認した。

## 甌（31～37）

### 1類（32・34）

口縁部が内湾するもの。32は、外面に接合痕が目立つ。歪みが著しい。34は、突帯を貼付しないものである。鉢の可能性も有り得る。

### 3類（31）

口縁端部でやや外反するもの。突帯を貼付しないものである。

### 5類（33）

口縁部が外湾するもの。薄手のつくりである。器面に接合痕があまり残らないものの、器面の凸凹が著しい。

### 平底（35～37）

35・36は、外底面に木葉痕が残る。37は、外底面に白色物質が付着する。

### 甌（38・39）

38は、胴部下半外面に白色物質が付着する。突帯にユビナデ上げ刻みを、間隔を空けて施す。胴部外面にタテ工具ナデ調整を行い、沈線状の筋が残る。39は、筒抜け形の底部である。

### 坏（40・41）

41は、平底となるものである。

### 鉢（42）

被熱痕が認められることから、鉢と判断した。

## イ 須恵器（43）

小型の壺が確認された。焼成が軟質である。

## 4 表土出土遺物（第14～17図）

土器と須恵器が認められた。28点図示した。

## ア 土器（44～71）

土器は甌、甌、坏、壺を確認した。

### 甌（44～57）

#### 1類（44～46）

44・45はわずかに内湾するものである。45は、器高の割に口径が大きいものである。外面はケズリ状のタテナデ調整を行い、沈線状の筋が残る。46は強く内湾するもので、突帯に竹管文を施す。

#### 2類（48）

口縁部が直行するもの。突帯を貼付しない。

#### 3類（47）

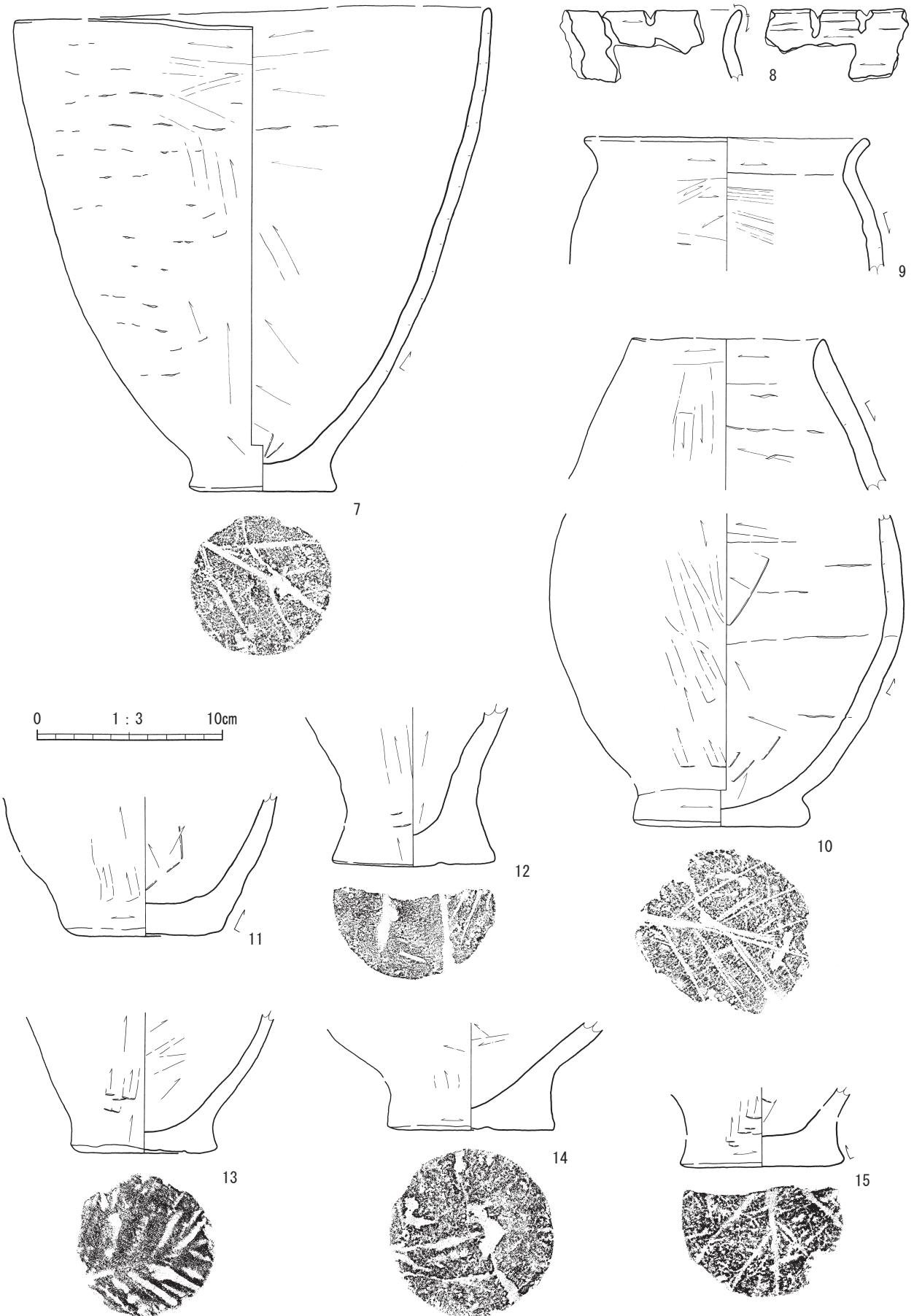
口縁端部でやや外反するもの。薄手のつくりである。

#### 4類（49・50）

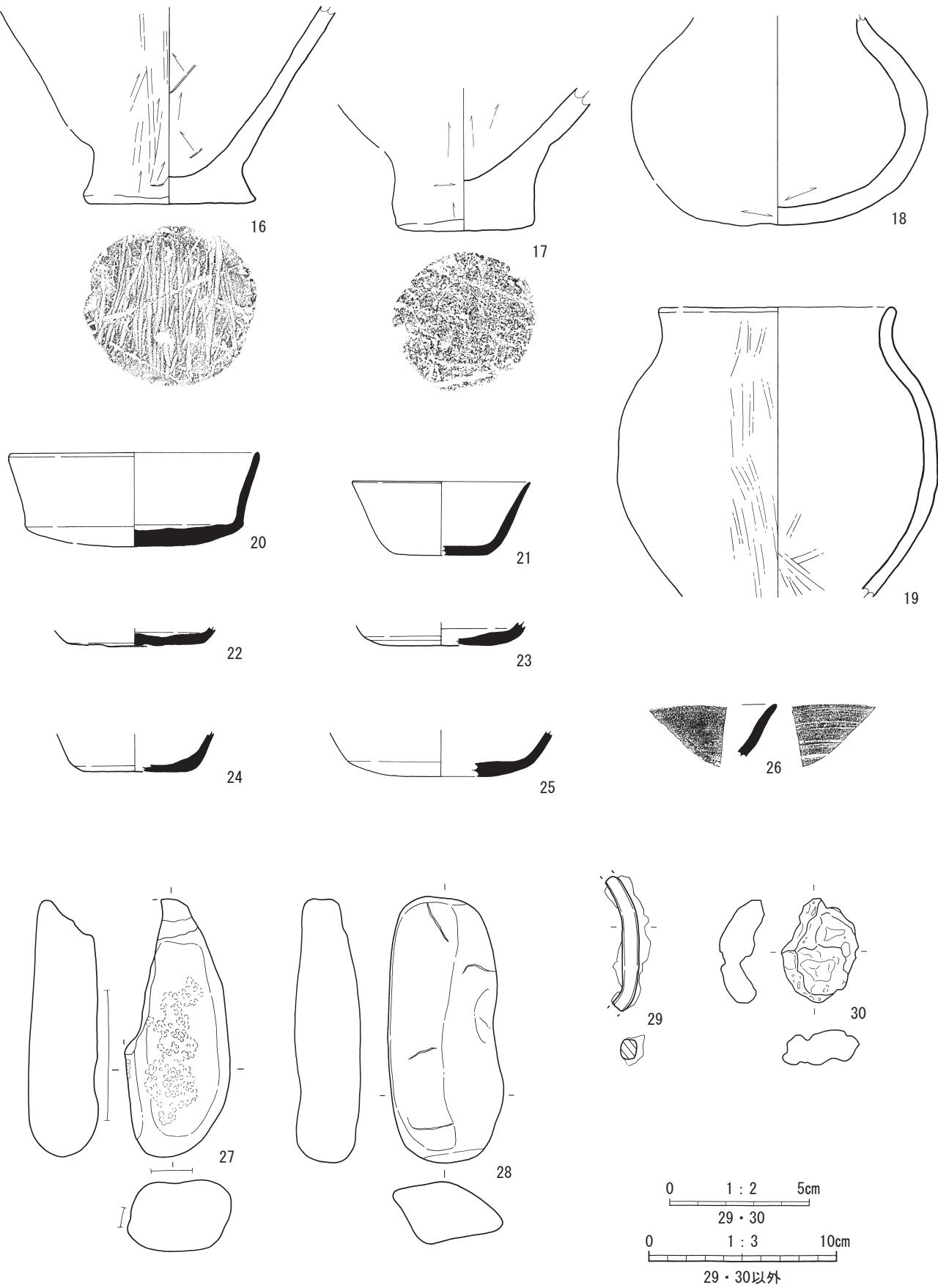
口縁部が肥厚するもの。49は、土器製作時に口縁部を肥厚させた上に粘土帶を貼付して刻みを施している。厚手のつくりである。50は断面三角形状の粘土帶を貼付して肥厚させ、ユビナデ上げ刻みを施す。

### 平底（51～53）

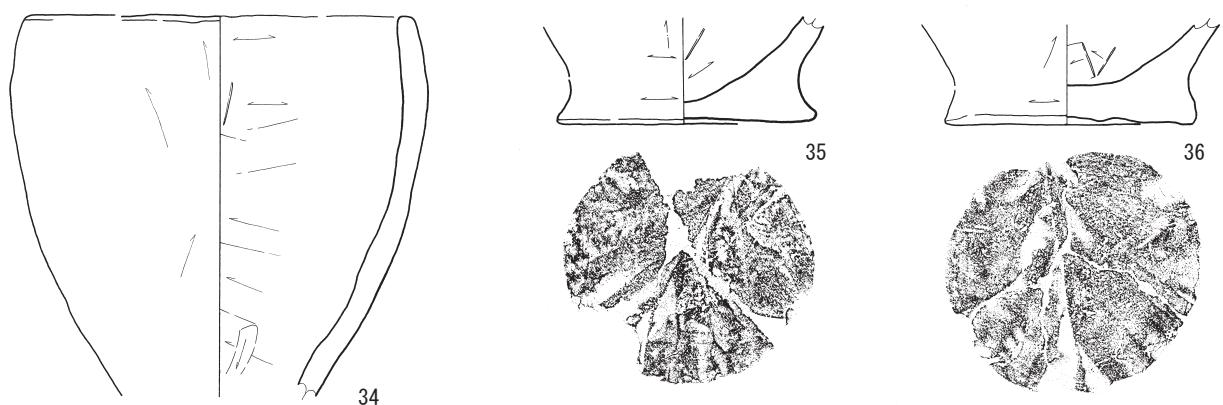
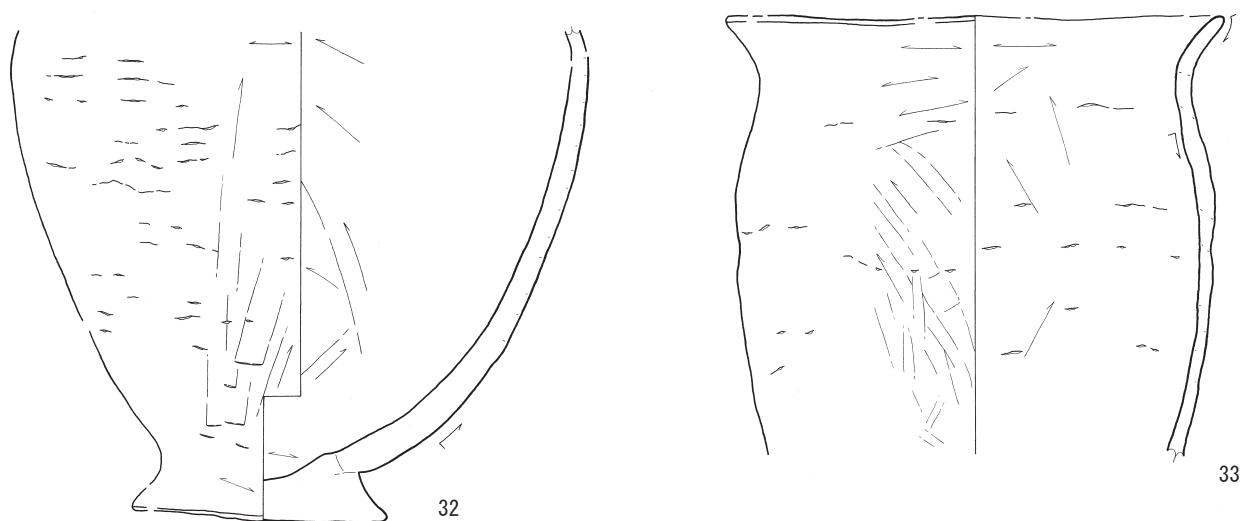
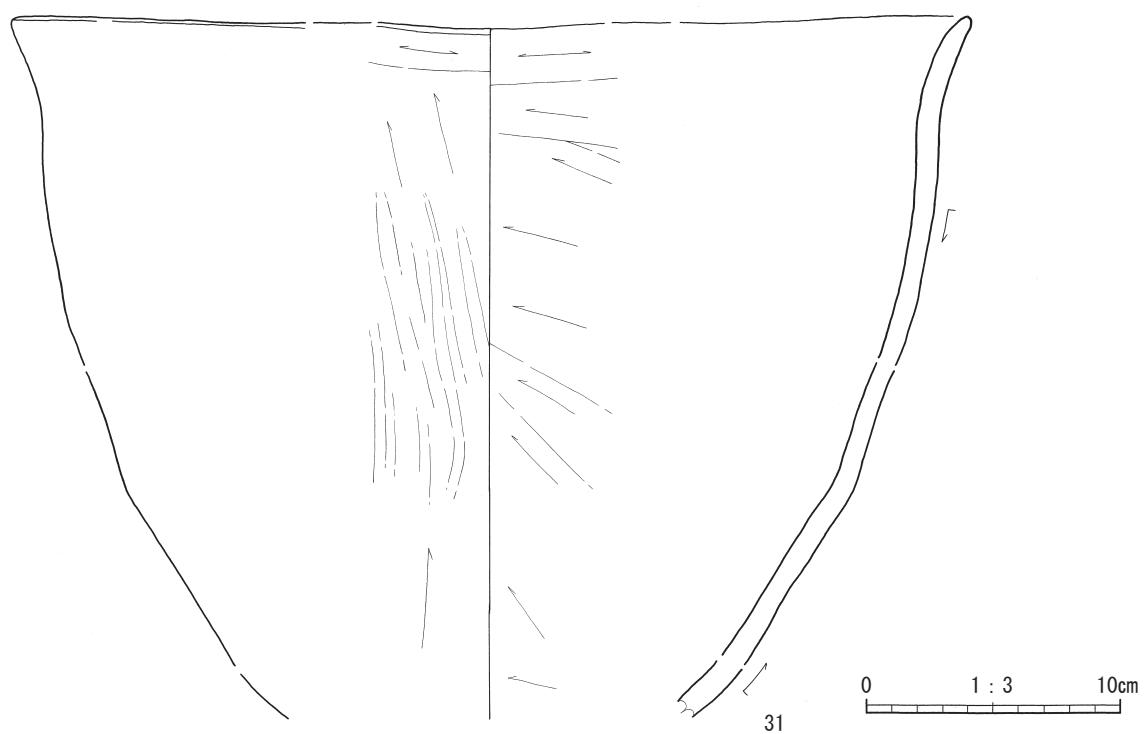
51・52は、外底面に木葉痕が残る。



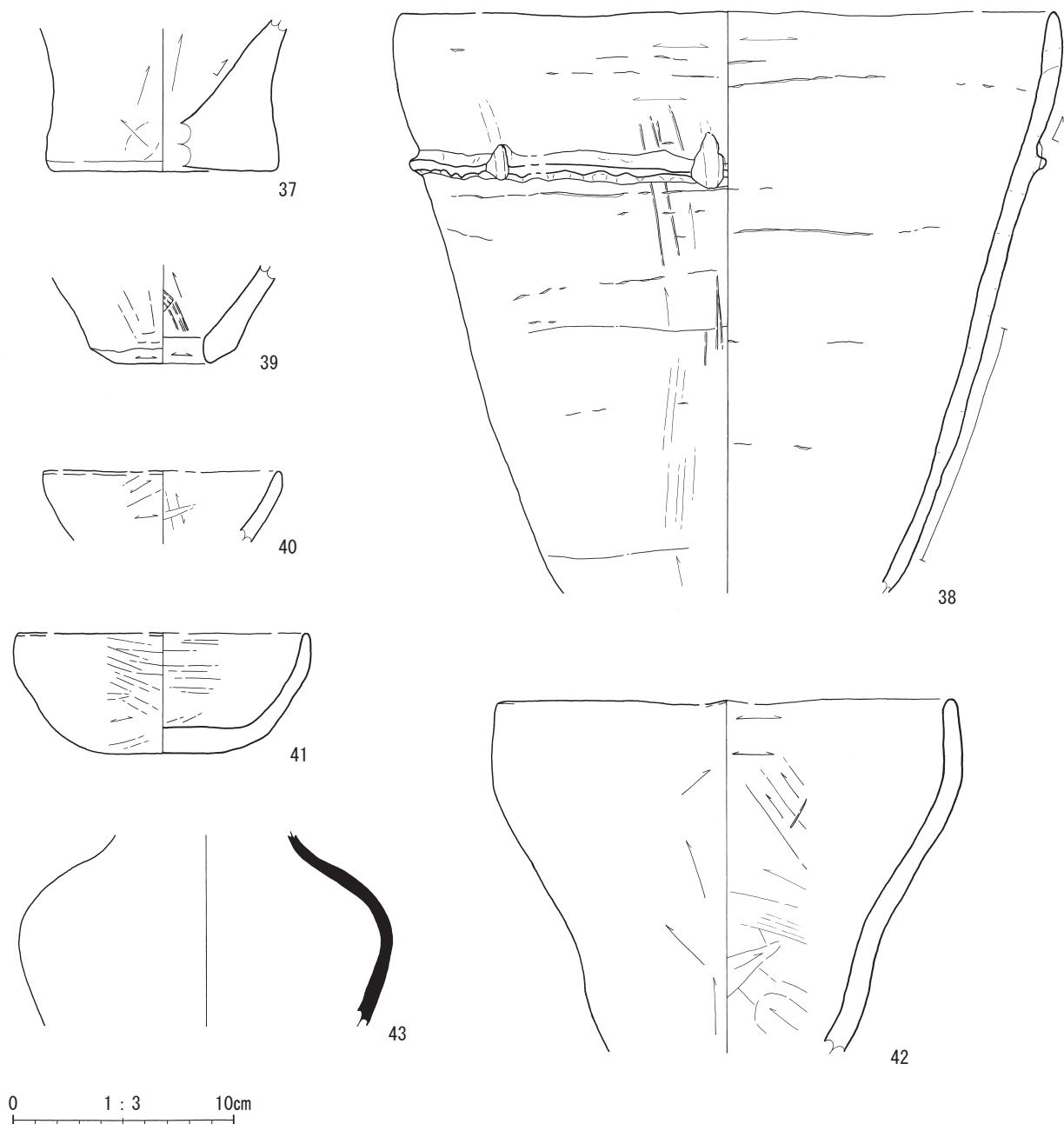
第10図 1号竪穴建物跡 出土遺物（2）



第11図 1号竪穴建物跡 出土遺物（3）

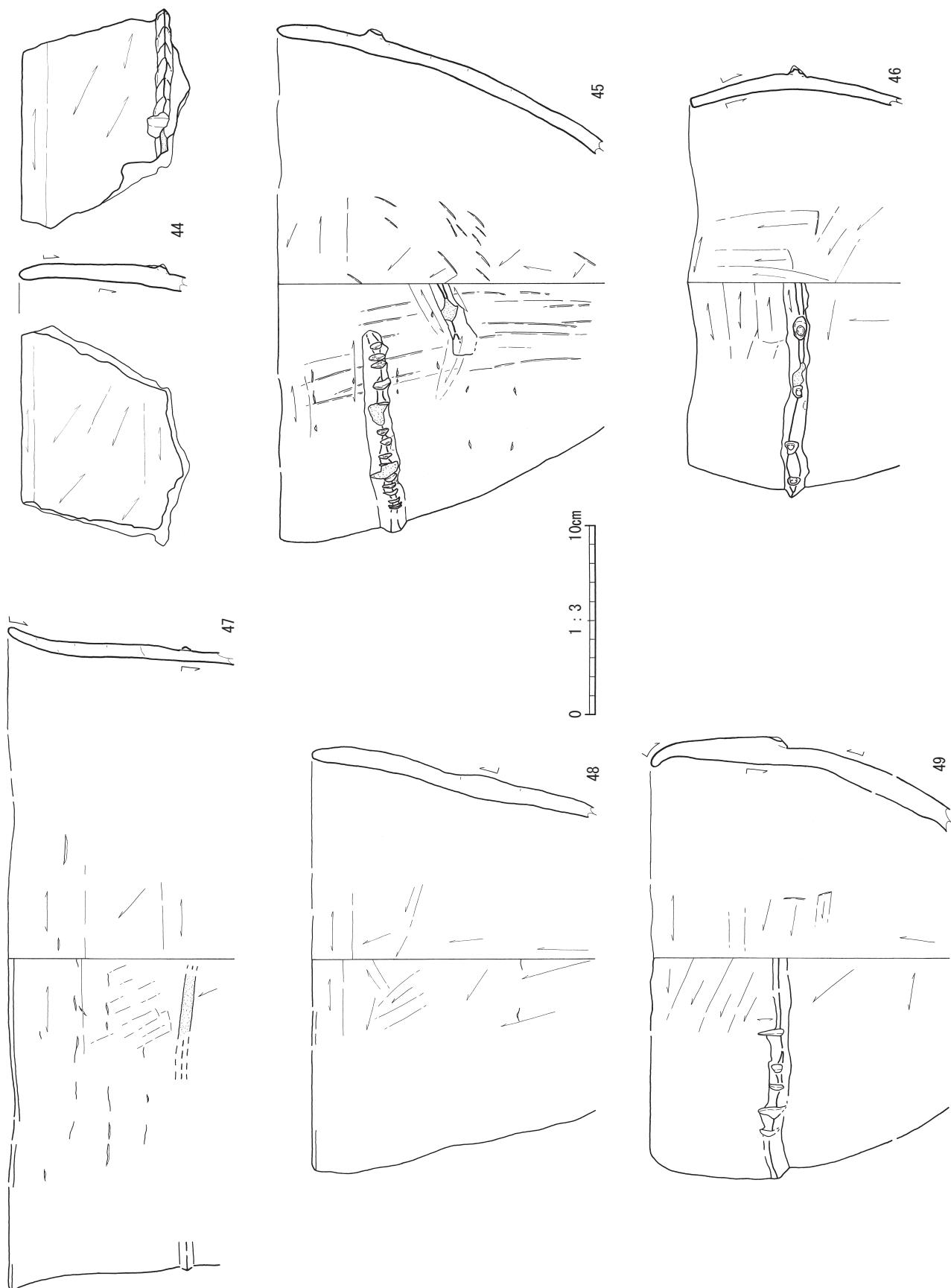


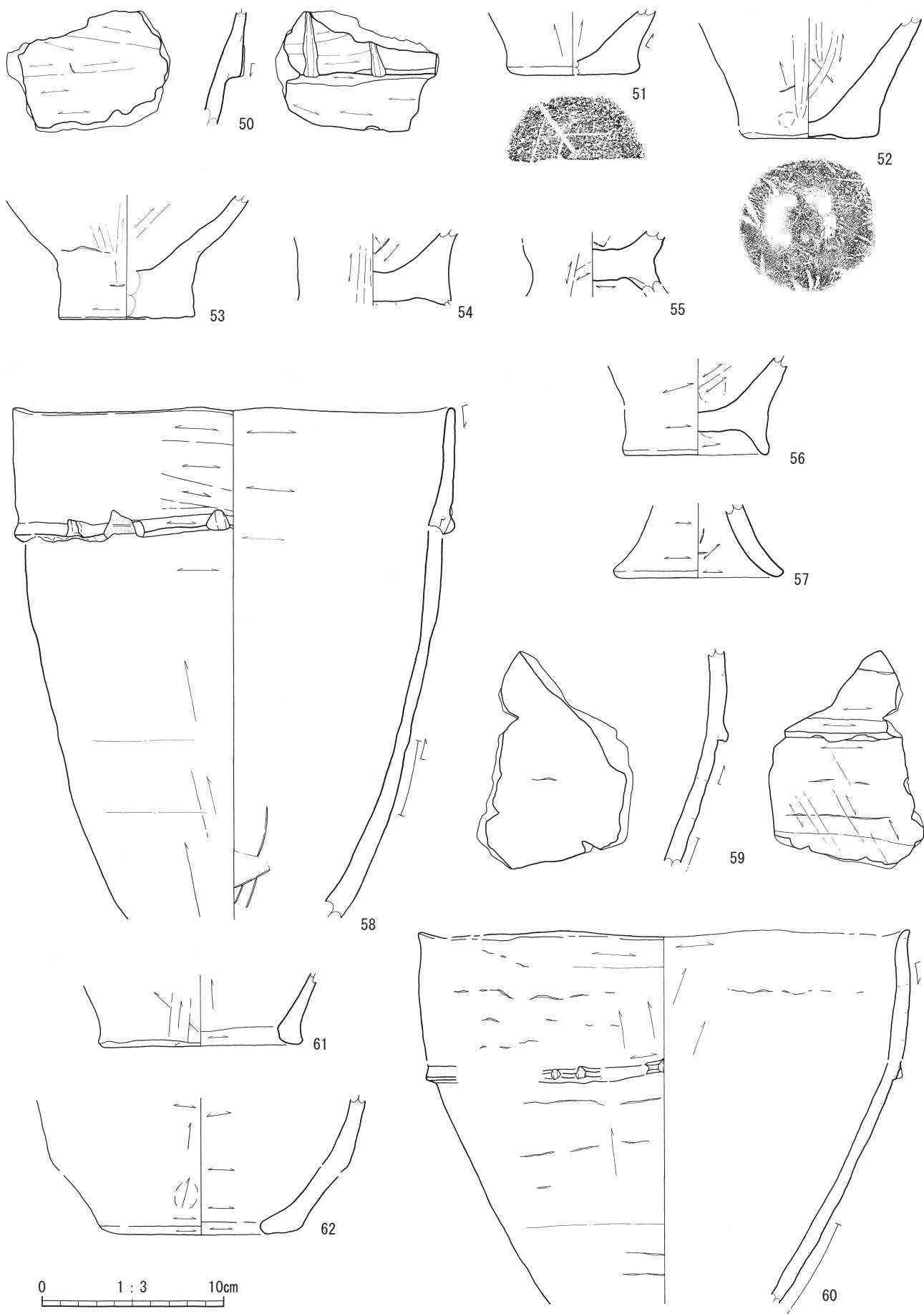
第12図 IV層出土遺物（1）



第13図 IV層出土遺物（2）

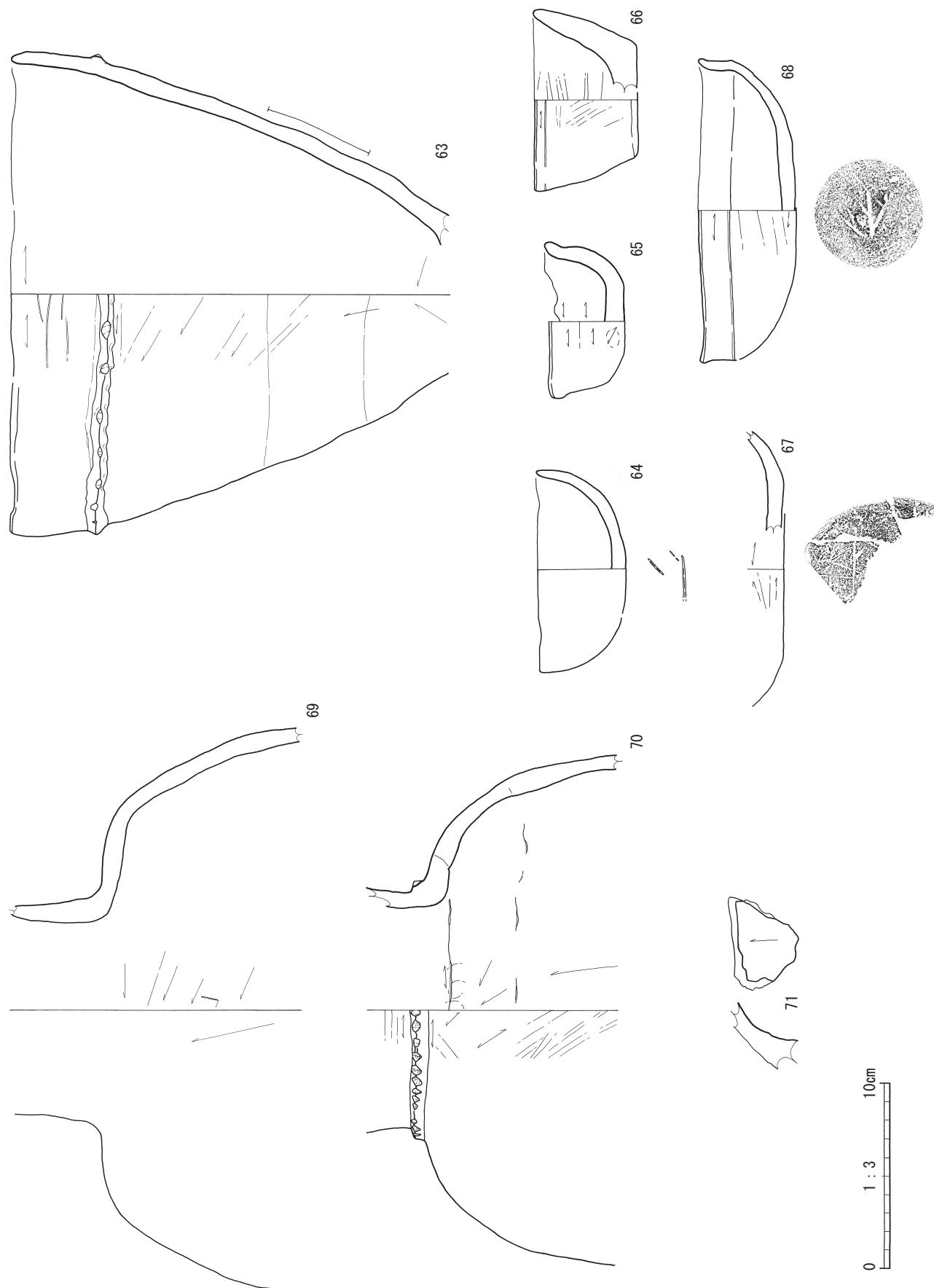
第14図 表土出土遺物（1）

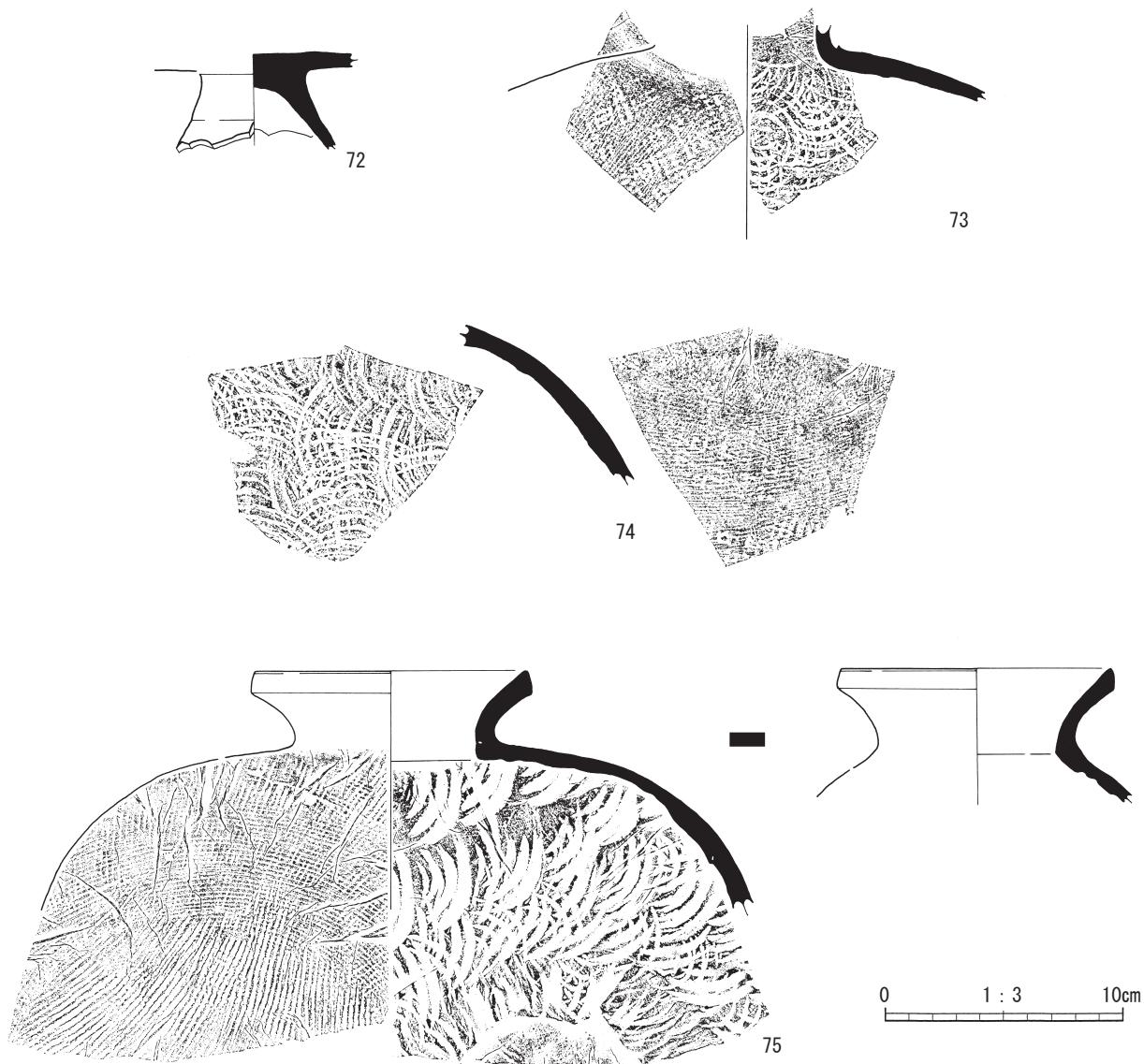




第15図 表土出土遺物（2）

第16図 表土出土遺物（3）





第17図 表土出土遺物（4）

#### 脚台（54～57）

54・56は低脚のものである。57は胎土に金色雲母を含む。

#### 甌（58～63）

58は、胴部が長めのものである。胴部外面下位に白色物質が付着しており、白色物質の上にススも付着している。59は、胴部外面に白色物質が付着する。

61・62は筒抜け形の底部である。60は、胴部外面に白色物質が付着する。口縁端部でやや外反する。63は、胴部下半に白色物質が付着する。口縁部外面はヨコ工具ナデ調整を行い、沈線状に擦痕が残る。

#### 壺（64～68）

64は丸底となるもので、外底面に木葉痕が残る。

65～67は平底となる。65は、口縁部に意図的な打ち欠きが認められる。66は口縁部外面に意図的かどうかは不

明であるが、沈線がみられる。67の外底面に木葉痕が残る。68は須恵器模倣壺で、外底面に木葉痕が残る。

#### 壺（69・70）

ともに大型の壺で、肩が張る器形を呈する。69は突帯を貼付しない。胎土に金色雲母や石英・長石類を含む。70は、頸部に突帯を貼付する。

#### 器種不明（71）

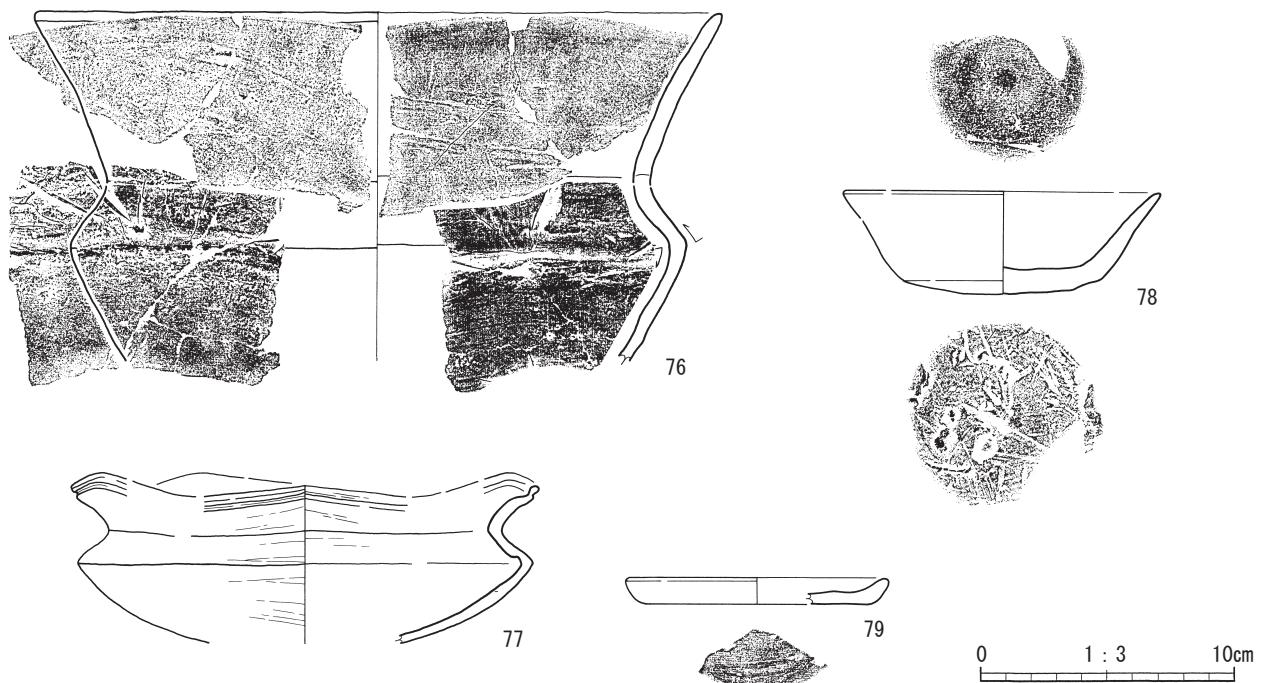
器種は判断できないが、甌の底部の可能性がある。胎土に頁岩の小石を含むことから、宮崎平野部からの搬入品と考える。

#### イ 須恵器（72～75）

高壺、甌、横瓶を確認した。

#### 高壺（72）

脚部に意図的な打ち欠きが認められる。



第18図 その他の時代 出土遺物

#### 甕 (73・74)

ともに外面は格子目タタキ後カキ目調整、内面は同心円状当て具痕がみられる。74は、外面に自然釉が掛かる。

#### 横瓶 (75)

頸部内面に接合痕が、胴部内面中央付近にくり抜き痕が確認できる。

#### 第2節 その他の時代 (第18図)

古墳時代終末期以外の時代は縄文時代晚期、古代、中世の遺物が認められた。

##### 1 縄文時代晚期 (76・77)

76は深鉢で、頸部と胴部の屈曲部が近接する。外面は工具ナデ調整、内面はヨコナデ調整が行われる。胎土に細かい金色雲母を含む。

77は精製浅鉢である。口縁部の立ち上がりが、沈線を使った見かけ上のものとなる。口径が胴径とほぼ同じである。4箇所に頂部をもつ波状口縁を呈する。

##### 2 古代 (78)

壺である。底部外面はやや丸味をもち、体部は直線的に立ち上がる。底部外面はヘラ切り後ナデ調整が行われる。植物痕のような何らかの痕跡が残る。見込みに残る回転ナデによる凸凹は浅い。

##### 3 中世 (79)

皿で、器高は2cm以下、口径は10.4cmを測る。見込みが凹んでいる。底部外面は摩滅しているものの、糸切り離し痕がわずかに認められる。

## 第5章 総 括

### 第1節 古墳時代終末期

本遺跡の中心となる時期である。竪穴建物跡が1基検出され、本遺跡が集落跡であったことが判明した。

#### 1 遺物

土器や須恵器、そしてわずかではあるが石器、鉄器、鉄滓、棒状礫、軽石が認められた。以下、土器と須恵器について詳述する。

##### (1) 土器

土器の多くは笠貫式土器新段階、あるいは成川IVc式（橋本2019）、笠貫II式（松崎2021）に位置づけられる。

器種は甕、甌、壺、鉢、坏が認められた。宮崎平野部からの搬入土器も認められた。

##### ア 甕

###### ①器形について

口径をみると、20 cm前後のものと30 cm前後のものの2種類に大別できる。前者は、厚手で重量感がある。後者の中には、薄手で軽いものもある（第14図47）。

口縁部形態から内湾するもの（1類）、直行するもの（2類）、口縁端部でやや外反するもの（3類）、口縁部が肥厚するもの（4類）、口縁部が外湾するもの（5類）、短頸壺状を呈するもの（6類）に細分した。これらは、竪穴建物跡の出土状況から同時併存すると考える。

5類は、宮崎平野部の土師器甕の影響を受けたものと考える。5類とした第12図33は口縁部径が胴部最大径を上回っていることから、今塩屋毅行氏と松永幸寿氏の編年（今塩屋・松永2002）の9・10期（TK46～TK48型式併行）に併行する時期に位置づけられる可能性がある。

なお、33は器形が宮脇遺跡資料（志布志町教委2001）と類似しており、ここで宮脇遺跡資料を紹介しておく。今回の紹介にあたり、再実測を行った。

###### 宮脇遺跡出土資料の紹介（第19図）

96は口縁部が外湾するもので、底部は平底となる。外底面にはオオタニワタリの木葉痕が残り、枠殻圧痕も確認できる。口縁部内外面はヨコナデ調整を行い、擦痕が残る。胴部外面は丁寧なナデ調整、胴部内面はタテ・ナナメ工具ナデ調整を行う。

97は口縁部がやや外湾または「く」字状に強く外反するもので、底部が平底となる。外底面には、木葉痕が残る。口縁部内外面はヨコナデ調整を行い、擦痕が残る。胴部外面はタテ工具ナデ調整を行い、擦痕が残る。胴部内面はナナメ工具ナデ調整を行う。

96は口径20.0 cm、97は口径19.7 cmを測る。口径や器高がほぼ同一で、大きさに規格性がある。

ともに外面に接合痕は認められないものの、粘土帶積み上げによる器面の凸凹が目立つ。色調は赤味が強く、

橙色（7.5YR7/6）やにぶい赤褐色（5YR5/6）を呈し、古代土師器甕に色調が類似している。色調に関しては、第12図33とは異なる。

###### ②器面調整について

口縁部外面調整について、端部にヨコナデ調整を行うことで、擦痕が残るものが多い。

胴部調整について、タテ工具ナデやタテナデ、タテミガキ調整などが行われる。タテ工具ナデ調整の中にはケズリ状のものもあり、器面に筋が残る（第9図4など）。

器面に接合痕が残るものが多い。器面に接合痕が残らないものでも、粘土帶積み上げによる器面の凸凹が著しいものがある。

###### ③突帯について

突帯を貼付しないものが比較的多く認められ、近隣の上苑A遺跡や春日堀遺跡よりも多い印象がある。

###### ④底部形態について

底部形態は平底と脚台があり、平底のほうが多い。竪穴建物跡出土資料は、全て平底である。平底の中には、外底面に木葉痕が残るものが多い。ただし、葉の樹種は判断できなかった。

###### ⑤使用痕について

第9図2のように口縁端部に白色物質が付着するものが認められた（実測図断面の矢印部分）。これは、蒸し調理の際に甌と組み合わせて使われた甕である。

##### イ 甌

蒸気孔の形態は、全て筒抜け式であった。外面にススが付着しているものもある。全て胴部内面が摩滅しており、注目される。

胴部外面に白色物質が付着しているものが認められた（実測図断面と平面図にその範囲を示した）。この白色物質は、甕と甌を組み合わせた際にその接点から蒸気が漏れることを防ぐための目張りとして使用されたことが指摘されている（志布志市教委2021）。したがって、第13図38のように底部が欠損しているものの胴部外面に白色物質が付着しているものは、甌と判断した。

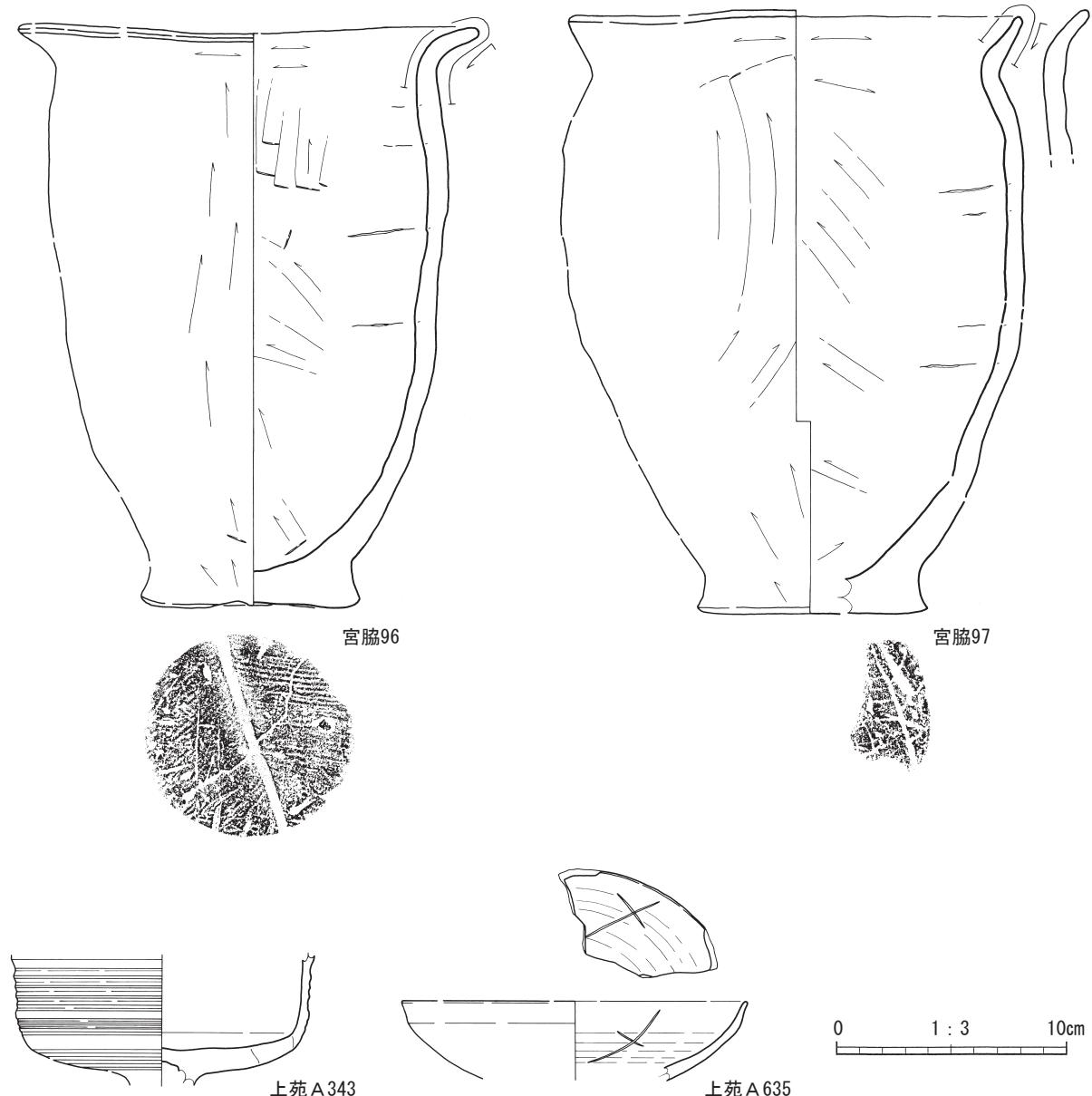
白色物質が付着している範囲の上端径は23.4～17.8 cm、下端径は17.2～14.0 cmの範囲であり、白色物質が付着する甕（第9図2）の口径22.8 cmと概ね近い値を示す。

##### ウ 坏

坏は口が開く浅めのものを基本としたが、コップ状のものも含めた。須恵器模倣坏も認められる。底部形態は平底と丸底があり、外底面に木葉痕が残るものもある。

##### エ 壺・鉢

壺と鉢は、ともに量的に少ない。壺は大型のものと小型のものがある。



第19図 関連資料（宮脇遺跡・上苑A遺跡）

### 力 搬入土器について

宮崎平野部からの搬入土器と考えた第16図71は、小片であるため器種断定は難しいが、甕の底部片の可能性がある。もし甕の底部片とすると、平底を呈すると考える。今塩屋・松永編年における7～10期（TK43～TK48型式併行）に比定可能であろう。

### （2）須恵器

本遺跡では、口縁部が直線的に立ち上がる坏身（坏G）や高坏、甕、横瓶、壺が認められた。

豎穴建物跡からは、坏Gのみ認められた。坏Gの底部は回転ヘラケズリ調整とヘラ切り未調整が認められる。坏Gが主体で、高台をもつ坏Bが認められないことから、豎穴建物跡は豊前編年V－2期（長2012）に併行する時

期（7世紀第3四半期前半）に位置づけておきたい。

ところで、坏Gの中で口縁～底部まで残存しているもの（第11図20・21）は、色調が橙色や浅黄橙色を呈しており土師器に酷似する。そのため整理作業当初は土師器に分類していたが、土師器よりもやや焼成が硬めであったため、須恵器（「赤焼須恵器」）と判断した。

なお、「赤焼須恵器」と判断できる資料が上苑A遺跡（志布志市教委2021）でも出土していたため、ここで再度報告したい。

### 上苑A遺跡出土の赤焼須恵器（第19図）

343は18号豎穴建物跡出土資料で、体部片のみ報告していた。報告書刊行後、新たに同一個体と判断できる口縁部片を確認した。接合しないため、図上復元した。

口縁部外面に浅い沈線（凹線）を多重に巡らせ、体部外面にカキ目を施す。色調が橙色（5YR7/8）を呈し、焼成が軟質のため、回転台土師器として報告していた。

しかし、沈線を多重に巡らせる特徴から八女系須恵器の「塚ノ谷4号窯様式」の「赤焼高坏」（長・中島2013）である可能性を指摘したい。塚ノ谷4号窯の時期は、豊前編年III-3～V-1期頃（6世紀末～7世紀前葉）と想定されている。18号竪穴建物跡の時期は豊前編年V期併行であり、時期的に矛盾はないと考える。

26号竪穴建物跡出土の635も回転台土師器として報告したが、これも八女系須恵器の「赤焼高坏」の可能性を指摘しておきたい。

なお、北部九州において八女系須恵器と分布が重なるとされる飛燕式鉄鏃が上苑A遺跡でも出土しており（第136図770）、興味深い。

## 2 遺構

竪穴建物跡が1基検出された。検出された竪穴建物跡は方形で、4.3×3.9mのほぼ正方形を呈する。

この竪穴建物跡は検出レベルが低く、検出面から床面までの深さが0.15～0.2mを測る。上苑A遺跡では、実際の竪穴建物の深さは1m弱と推定されている（志布志市教委2021）。したがって、本遺跡例の本来の規模はもう少し大きく、一辺が5.0m前後になると考える。

貼床は概ね0.1～0.2mの厚さで、黒色土やアカホヤブロックなど竪穴建物の構築時に掘り上げた土で形成されている。貼床除去後の掘方床面には、掘削痕と推定される凸凹が残る。

4本柱建物である。柱穴は概ね直径30cm、深さは検出面（掘方床面）から約20cmであり、規格性が認められる。

日常道具としての土器や須恵器が出土し、地床炉も存在することから、住居としての性格であったと考える。

## 3 遺跡立地について

市内における古墳時代終末期前後の遺跡は、これまで河川の河岸段丘の中位面——菱田川では春日堀遺跡・仕明遺跡・上苑A遺跡、安楽川では安良遺跡・宮脇遺跡——で見つかっていた。

本遺跡は菱田川河口から約3.0km上流西岸の自然堤防上に位置しており、中位段丘面より下位に立地する遺跡を初めて認識することとなった。本遺跡は春日堀遺跡と距離的にも時期的にも近く、両者の関係が気になるところである。

## 第2節 その他の時代

### 1 繩文時代晚期

繩文時代晩期に属する土器が2点認められた。深鉢と精製浅鉢である。深鉢は頸部と胴部の屈曲部が近接していることから、黒川式古段階（堂込1997）に比定できる。精製浅鉢は口縁部の立ち上がりが沈線を使った見かけ上

のものとなり、口径が胴部最大径とほぼ同じであることから、黒川式中段階と比定できる。

### 2 古代

底部切り離し技法がヘラ切りであることから、古代の坏と考えた。

### 3 中世

底部切り離し技法が糸切りであることから、中世に位置づけられる。志布志地方と歴史的関係の深い都城盆地における中世土師器の編年を行った棄畠光博氏による研究（棄畠2004）を参考にすると、第18図79は復元口径が10.4cmを測ることから、一括資料②（12世紀前半～中頃）に比定できる。

### 【引用・参考文献】

- 有明町教育委員会 2005『仕明遺跡』有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）  
今塙屋毅行 2011「日向国における古代前期の土師器甕とその様相」『古文化談叢』65-3 九州古文化研究会  
今塙屋毅行・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器」『古墳時代中・後期の土師器』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨集 九州前方後円墳研究会  
棄畠光博 2004「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的作業（1）」『宮崎考古』19 宮崎考古学会  
(公財)鹿児島県埋蔵文化財調査センター 2020a『春日堀遺跡I』  
(公財)鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(32)  
(公財)鹿児島県埋蔵文化財調査センター 2020b『安良遺跡』(公財)鹿児島県埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(34)  
志布志市教育委員会 2012『安良遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（7）  
志布志市教育委員会 2021『上苑A遺跡2』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（14）  
志布志町教育委員会 2001『宮脇遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（28）  
長直信 2012 「豊前地域の土器様相と須恵器生産－7世紀を中心にして」『古文化談叢』67 九州古文化研究会  
長直信・中島圭 2013 「福岡県内出土の八女系須恵器について」『第16回九州前方後円墳研究会 古墳時代の地域間交流1』九州前方後円墳研究会  
堂込秀人 1997「南九州縄文晚期土器の再検討—入佐式と黒川式の細分—」『鹿児島考古』31 鹿児島県考古学会  
橋本達也 2019「大隅・薩摩地域における古墳時代中期の集落と古墳」『集落と古墳の動態II』第22回九州前方後円墳研究会  
松崎大嗣 2021「成川式土器の分類と編年」『地域政策科学研究』18 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科  
**【謝辞】**  
総括執筆にあたり、長直信氏（文化庁）と松崎大嗣氏（指宿市教育委員会）にご教示頂いた。記して感謝申し上げます。

第2表 土器・須恵器観察表（1）

報告 No.	取上 No.	遺構	層	レベル	時期	分類		色調		調整		特徴的 胎土	備考
						L1	L2	外面	内面	外面	内面		
1	150(ほか、 22点)	SH1	埋土	7. 559～ 7. 343	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	口～胴：ナナメケズリ/タテ・ナナメ ケズリ/ナデ 底：ケズリ・ナデ	ナナメケズリ/ナナメナデ		口径20.4cm 底径7.8cm
2	294	SH1	埋土	7. 541	古墳終末期	笛貫式	甕	にぶい褐 (7.5YR6/3)	橙 (7.5YR6/6)	ヨコナデ/ナナメ工具ナデ/ タテ工具ナデ(ハケメ状)/タテ工具ナ デ後タテミガキ	ヨコナデ/ ヨコ・ナナメ工具ナデ		復元口径22.8cm
3	12(ほか、 5点) 一括	SH1	埋土	7. 608～ 7. 515	古墳終末期	笛貫式	甕	浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)	ヨコナデ/タテナデ	ヨコナデ/丁寧なタテナデ		復元口径28.6cm
4	228(ほか、 3点)	SH1	埋土	7. 594～ 7. 571	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	ヨコナデ/ タテナデ(ケズリ状)	ヨコ工具ナデ		
5	一括 7(ほか、 3点)	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	褐灰 (5YR4/1)	橙 (5YR6/8)	タテ工具ナデ後ヨコナデ/ タテ工具ナデ	ナナメ工具ナデ後ヨコナデ/ ナナメ・タテ工具ナデ		復元口径20.0cm
6	345	SH1	埋土	7. 378	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	ヨコナデ/ ヨコナデ一部ナナメナデ	ナナメ・ヨコ工具ナデ		
7	2(ほか、 26点)	SH1	埋土	7. 542～ 7. 320	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	口～胴：ヨコナデ/ナナメ工具ナデ/ナ デ 底：木葉痕	ヨコナデ/丁寧なナナメナデ/ ナナメ工具ナデ		口径25.8cm 底径8.0cm
8	135	SH1	埋土	7. 517	古墳終末期	笛貫式	甕	にぶい橙 (5YR6/4)	橙 (7.5YR7/6)	ヨコナデ	ヨコナデ		
9	34	SH1	埋土	7. 566	古墳終末期	笛貫式	甕	浅黄 (2.5Y8/4)	橙 (7.5YR7/6)	ヨコナデ/ヨコ・ナナメナデ	ヨコナデ/ ナナメ工具ナデ(ハケメ状)	赤色粒	
10	60	SH1	埋土	7. 596～ 7. 494	古墳終末期	笛貫式	甕	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	口～胴：ヨコナデ/タテ工具ナデ/タテ ミガキ/タテ・ナナメケズリ/ヨコナデ 底：木葉痕	ヨコナデ/ナナメナデ/ ヨコ工具ナデ		復元口径10.4cm 底径9.4cm
11	125(ほか、 6点)	SH1	埋土	7. 481～ 7. 379	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	胴：タテ工具ナデ/ヨコナデ 底：ナデ	ナナメ工具ナデ		底径8.6cm
12	102(ほか、 1点)	SH1	埋土	7. 608～ 7. 460	古墳終末期	笛貫式	甕	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)	胴：タテ工具ナデ 底：木葉痕後ナデ	タテナデ		底径8.8cm
13	81	SH1	埋土	7. 58	古墳終末期	笛貫式	甕	黄橙 (7.5YR7/8)	明黄褐 (10YR7/6)	胴：タテ工具ナデ 底：木葉痕後ナデ	ナナメナデ		底径8.0cm
14	82(ほか、 1点)	SH1	埋土	7. 533	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (5YR6/8)	明赤褐 (5YR5/6)	胴：ナナメケズリ/ユビオサエ後タテ ナデ/ヨコナデ 底：木葉痕後ナデ	ナナメケズリ		底径9.0cm
15	311	SH1	埋土	7. 456	古墳終末期	笛貫式	甕	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	胴：タテ工具ナデ/ヨコナデ 底：木葉痕	タテ工具ナデ		底径9.0cm
16	92(ほか、 4点)	SH1	埋土	7. 550～ 7. 506	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR7/6)	胴：タテ工具ナデ 底：木葉痕後ヘラミガキ	タテ工具ナデ		底径9.2cm
17	一括 - SH1	埋土	-	-	古墳終末期	笛貫式	甕	明赤褐 (2.5YR5/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	胴：タテナデ/ヨコナデ 底：ナデ	タテケズリ		底径7.4cm
18	198(ほか、 15点)	SH1	埋土	7. 519～ 7. 377	古墳終末期	笛貫式	壺	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	摩滅のため不明	摩滅のため不明		
19	76(ほか、 12点)	SH1	埋土	7. 576～ 7. 414	古墳終末期	笛貫式	壺	黒褐 (10YR3/1)	黒 (10YR2/1)	タテミガキ	摩滅のため不明/ミガキ		口径12.4cm
20	501	SH1	埋土	-	古墳終末期	須恵器	坏G	橙 (5YR7/8)	橙 (5YR7/8)	口：回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	口：回転ナデ 底：回転ナデ後不整ナデ		復元口径13.6cm
21	73(ほか、 2点)	SH1	埋土	7. 616～ 7. 554	古墳終末期	須恵器	坏G	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	口：回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ		復元口径9.5cm 復元底径5.0cm
22	一括 -	表土	-	-	古墳終末期	須恵器	坏G	灰 (N7/)	灰 (N6/)	体：回転ナデ 底：ヘラ切り未調整	回転ナデ		復元底径7.2cm
23	118	SH1	埋土	7. 508	古墳終末期	須恵器	坏G	灰 (N5/)	灰 (N6/)	体：回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ		復元底径6.0cm
24	19	SH1	埋土	7. 59	古墳終末期	須恵器	坏G	灰白 (10Y8/)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	体：回転ナデ 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ		復元底径5.4cm
25	一括	SH1	埋土	-	古墳終末期	須恵器	坏G	灰白 (2.5Y8/1)	灰白 (2.5Y8/1)	体：摩滅のため不明 底：回転ヘラケズリ	回転ナデ		
26	26	SH1	埋土	7. 54	古墳終末期	須恵器	坏G	灰 (N6/)	灰 (N6/)	回転ナデ	回転ナデ		
31	一括 - 4	-	-	-	古墳終末期	笛貫式	甕	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	ヨコナデ/タテナデ/ タテミガキ/丁寧なタテナデ	ヨコナデ/丁寧なヨコ・ナナメナデ/ ナナメナデ(ケズリ状)		復元口径38.0cm
32	一括 - 4	-	-	-	古墳終末期	笛貫式	甕	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/8)	口～胴：ヨコ工具ナデ/タテ工具ナデ/ 不整ナデ 底：ケズリ	ナナメ工具ナデ		底径10.0cm
33	一括 - 4	-	-	-	古墳終末期	笛貫式	甕	黒 (10YR2/1)	褐 (7.5YR4/3)	ヨコナデ/ タテ・ナナメ工具ミガキ	ヨコナデ/タテ・ナナメナデ		復元口径19.4cm
34	一括 - 表土	-	-	-	古墳終末期	笛貫式	甕	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	タテナデ	ヨコ・ナナメナデ		復元口径15.2cm
35	一括 - 4	-	-	-	古墳終末期	笛貫式	甕	黄橙 (10YR8/6)	橙 (5YR7/6)	胴：タテケズリ/ヨコナデ 底：木葉痕後ミガキ	工具ナデ・ナデ		底径10.2cm
36	一括 - 4	-	-	-	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	胴：ナナメナデ/ヨコナデ 底：木葉痕後丁寧なナデ	ヨコ工具ナデ		底径9.8cm
37	一括 - 4	-	-	-	古墳終末期	笛貫式	甕	黄橙 (10YR8/6)	橙 (5YR6/6)	胴：タテ・ナナメナデ/ユビオサエ後 ナナメナデ 底：ナデ	丁寧なタテナデ		復元底径11.0cm
38	一括 - 4	-	-	-	古墳終末期	笛貫式	瓶	橙 (5YR7/8)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	ヨコナデ/タテ工具ナデ/ 丁寧なタテナデ	ヨコナデ/摩滅のため不明		復元口径29.6cm
39	一括 - 4	-	-	-	古墳終末期	笛貫式	瓶	明赤褐 (2.5YR5/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	タテ工具ナデ/ヨコナデ	タテ工具ナデ(ハケメ状) ・タテナデ/ヨコナデ		復元底径6.8cm
40	一括 - 4	-	-	-	古墳終末期	笛貫式	坏	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	ヨコナデ・ナナメナデ	丁寧なタテナデ後ヨコナデ		復元口径10.8cm
41	一括 - 4	-	-	-	古墳終末期	笛貫式	坏	橙 (5YR6/6)	橙 (2.5YR6/6)	口～体：ヨコ・ナナメミガキ 底：摩滅のため不明	ヨコミガキ		復元口径13.2cm 復元底径5.4cm
42	一括 - 4	-	-	-	古墳終末期	笛貫式	鉢	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (5YR6/6)	ナナメ・タテナデ	ヨコナデ/ナナメ工具ナデ/ ナナメナデ		復元口径21.0cm
43	一括 - 4	-	-	-	古墳終末期	須恵器	壺	灰白 (5Y8/1)	灰白 (5Y8/1)	摩滅のため不明	摩滅のため不明		
44	一括 - 表土	-	-	-	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	ヨコナデ/ナナメナデ	ヨコナデ/ナナメ・ヨコナデ		

第3表 土器・須恵器観察表（2）

報告 No.	取上 No.	遺構	層	レベル	時期	分類		色調		調整		特徴的 胎土	備考
						L1	L2	外面	内面	外面	内面		
45	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (5YR6/8)	明赤褐 (5YR5/8)	ヨコナデ/タテ工具ナデ	ヨコ・ナナメナデ/ナナメ工具ナデ		復元口径27.0cm
46	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ/ヨコナデ・タテナデ	ヨコナデ/タテ工具ナデ/ナナメナデ		復元口径19.4cm
47	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (5YR6/6)	ヨコナデ/ナナメ工具ナデ/ナナメナデ	ヨコナデ/ナナメナデ/ヨコナデ		復元口径35.2cm
48	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	ヨコナデ/タテ・ナナメナデ	ヨコナデ/タテ・ナナメナデ/タテナデ		復元口径22.0cm
49	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (5YR6/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	ナナメ工具ナデ/ナナメナデ	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ/タテナデ		復元口径20.4cm
50	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	褐灰 (7.5YR4/1)	橙 (7.5YR7/6)	ヨコナデ/ヨコ・ナナメナデ	ヨコ工具ナデ		
51	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (5YR7/8)	橙 (5YR7/8)	胴:タテナデ 底:木葉痕後ナデ	タテナデ		復元底径7.4cm
52	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	胴:タテミガキ・タテ工具ナデ/ユビ オサエ 底:木葉痕後ナデ	タテ・ナナメナデ後 タテミガキ		底径7.8cm
53	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	胴:タテ工具ナデ 底:ナデ	タテ・ナナメナデ		復元底径8.0cm
54	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (5YR6/6)	灰褐 (7.5YR4/2)	タテナデ・タテミガキ	胴:工具ナデ 脚:ユビオサエ後ナデ		
55	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (5YR6/6)	ナナメナデ	胴:工具ナデ 脚:ヨコナデ		
56	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	浅黄褐 (10YR8/4)	橙 (7.5YR7/6)	ヨコ・ナナメナデ	胴:ユビオサエ後ナナメナデ 脚:ユビオサエ後ヨコナデ		脚径8.2cm
57	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄褐 (10YR6/4)	ヨコナデ	工具ナデ/ヨコナデ	金色ウンモ	復元脚径9.5cm
58	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	にぶい赤褐 (5YR5/4)	橙 (5YR6/6)	ヨコナデ/丁寧なタテナデ	ヨコナデ/摩滅のため不明/ ナナメ工具ナデ		復元口径24.4cm
59	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	ヨコナデ/ナナメ工具ナデ	摩滅のため不明		
60	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (7.5YR7/6)	灰白 (10YR7/1)	ヨコナデ/タテナデ	ヨコナデ/タテナデ/ 摩滅のため不明		復元口径27.2cm
61	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	橙 (5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	タテナデ/ナデ	丁寧なタテナデ/ヨコナデ		復元底径10.8cm
62	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	ヨコナデ・タテナデ/ヨコナデ	ヨコナデ		復元底径6.4cm
63	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕	明黄褐 (10YR6/6)	浅黄褐 (10YR8/4)	ヨコ工具ナデ/ナナメ工具ナデ/タテナデ	ヨコナデ/摩滅のため不明/ ナナメナデ		復元口径26.2cm
64	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	坏	黄橙 (10YR8/6)	黄橙 (7.5YR8/8)	口へ体: 黄橙のため不明 底: 木葉痕	摩滅のため不明		復元口径11.2cm
65	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	坏	浅黄褐 (10YR8/4)	浅黄 (2.5YR8/4)	口へ体: ヨコナデ/ユビオサエ後ナデ 底: 摩滅のため不明	口へ体: ヨコナデ 底: ナデ		口径8.6cm 底径3.4cm
66	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	坏	にぶい黄褐 (10YR7/4)	浅黄 (2.5YR8/4)	口へ体: ヨコナデ/ヨコミガキ/タテミガキ一部タテナデ 底: ナデ	ヨコミガキ		復元口径10.0cm 復元底径6.2cm
67	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	坏	浅黄褐 (10YR8/4)	明黄褐 (10YR7/6)	ヨコケズリ/木葉痕後ナデ	丁寧なナデ		復元底径9.4cm
68	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	坏	橙 (5YR7/8)	橙 (5YR7/8)	ヨコナデ/ヨコ工具ナデ/ 木葉痕後ケズリ	摩滅のため不明		復元口径16.4cm
69	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	壺	橙 (7.5YR6/6)	明赤褐 (5YR5/6)	ヨコナデ/タテナデ	摩滅のため不明/ ヨコナデ/ナナメ工具ナデ	石英・長石類 金色ウンモ	
70	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	壺	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	ヨコ工具ナデ/ナナメナデ/ タテ・ナナミガキ	摩滅のため不明/ユビオサエ後ヨコナデ/タテナデ		
71	一括	-	表土	-	古墳終末期	笛貫式	甕?	黄橙 (10YR8/6)	黄橙 (10YR8/6)	タテナデ	摩滅のため不明	頁岩小円礫	宮崎平野部 搬入土器
72	一括	-	表土	-	古墳終末期	須恵器	高坏	灰 (N7/)	灰 (N7/)	回転ナデ	环: 回転ナデ後不整ナデ 脚: 回転ナデ		
73	一括	-	表土	-	古墳終末期	須恵器	甕	灰 (N5/)	灰 (N5/)	格子目タタキ後ヨコナデ・カキメ	回転ナデ/同心円文當て具痕		
74	一括	-	表土	-	古墳終末期	須恵器	甕	オリーブ灰 (2.5GY5/1)	灰 (N6/)	格子目タタキ後カキメ	同心円文當て具痕		
75	一括	-	表土	-	古墳終末期	須恵器	横瓶	灰 (N6/)	灰 (N6/)	回転ナデ/格子目タタキ後カキメ	回転ナデ/同心円文當て具痕		
76	一括	-	4	-	縄文晚期	黒川式	深鉢	にぶい赤褐 (5YR4/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	ヨコナデ/ナナメ工具ナデ/ ヨコナデ	ヨコナデ	金色ウンモ	
77	一括	-	4	-	縄文晚期	黒川式	精製 浅鉢	黄灰 (2.5Y4/1)	黄灰 (2.5Y4/1)	ヨコミガキ	ヨコミガキ	金色ウンモ	
78	一括	-	4	-	古代	土師器	坏	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	ロヘ体: 回転ナデ 底: 回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ		復元口径12.5cm 底径7.6cm
79	一括	-	表土	-	中世	土師器	皿	浅黄褐 (7.5YR8/4)	浅黄褐 (7.5YR8/4)	ロヘ体: 回転ナデ 底: 回転糸切り	回転ナデ		復元口径10.4cm 復元底径9.0cm

第4表 石器等観察表

報告 No.	取上 No.	遺構	層	レベル	時期	分類		石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
						L1	L2					
27	327	SH1	埋土	7.446	古墳終末期	石器	石錐	頁岩	13.7	5.7	3.8	401.1
28	353	SH1	埋土	7.320	古墳終末期	棒状礫	-	頁岩	14.3	6.2	3.5	454.0

第5表 鉄器・鉄滓観察表

報告 No.	取上 No.	遺構	層	レベル	時期	分類		石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
						L1	L2						
29	290	SH1	埋土	7.431	古墳終末期	鉄製品	建築部材?	4.8(残存長)	0.5	0.5~0.8	5.8		
30	191	SH1	埋土	7.413	古墳終末期	鉄滓	碗型滓?	3.8	2.8	1.4	14.8	着磁性なし	

# 写 真 図 版





①遺跡遠景（東から）



②遺跡現況（南から）



③西壁土層断面（東から）



④北壁土層断面（南から）



⑤SH 1 検出作業状況（北から）



⑥SH 1 検出（北から）



⑦SH 1 遺物出土状況（北から）



⑧SH 1 掘方完掘（北から）

図版2



1



2



3



5



7



10

古墳時代土器（甕 1）



31



32



33



46

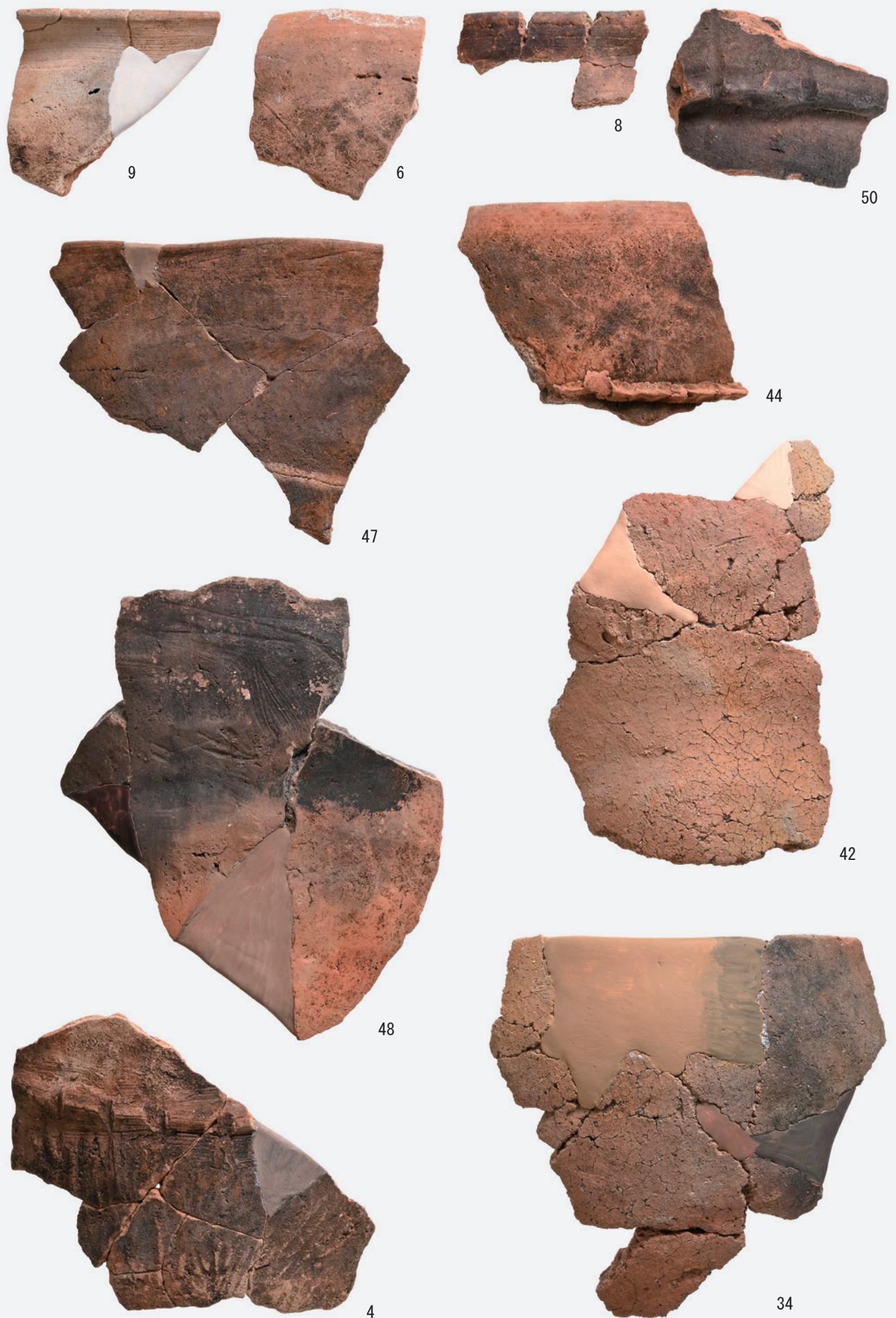


49

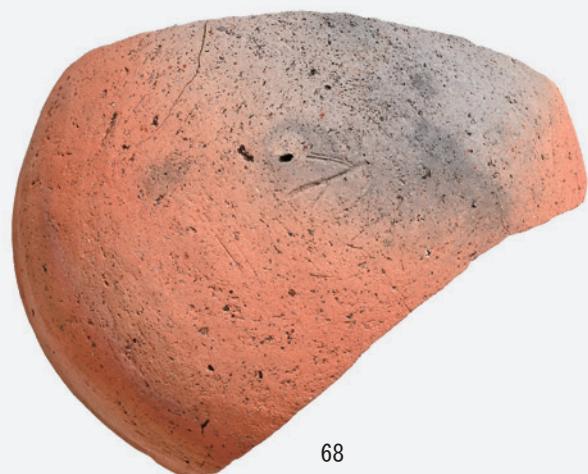


45

図版 4



古墳時代土器（甕 3）



68



57



55



35



36



51



56



15



14



13



16

図版 6



18



19



69



70



38



63



58



75



60



59



60



39



61



62

## 図版8



古墳時代土器（坏）・古墳時代須恵器・古代土師器（坏）



27



28



76



76



77



上苑 A 343



79



上苑 A 635



上苑 A 343



宮脇97



宮脇96

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（17）

民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

## 中牟田遺跡

発行年月 2024年3月

編集・発行 鹿児島県志布志市教育委員会

〒899-7192 鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目1番1号

TEL 099-472-1111 FAX 099-473-1880

印刷所 西文社印刷株式会社 志布志支店

〒899-7103 鹿児島県志布志市志布志町志布志二丁目16番21号

TEL 099-471-1328 FAX 099-471-1329